

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



CONTENTS

研究成果報告

- 『北九州市若松洞海湾における船上生活者の歴史の変容ー オーラルヒストリーからのアプローチー』を刊行して 田上 繁 2
- ローマ、ヴァージ、ピラネージ 鳥越輝昭 8
- 『18世紀ヨーロッパ生活絵引』刊行に寄せてー渋沢敬三の「絵引」からヨーロッパ都市景観図分析まで 熊谷謙介 10
- ヴェーニングのバイエルン公国版画集成のこと ステファン・ブッヘンベルゲル 12

研究調査報告

- ホリのある暮らしー柳川（福岡県）の調査よりー 安室 知 14
- 戦時下日本の大衆メディア研究
台湾調査報告 鈴木一史・松本和樹 18

研究エッセイ

- 和船とともに歩んだ30年 昆 政明 22
- サンクトペテルブルクにて 駒走昭二 24
- 連載 戦時下メディア研究報告
- 戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語ー「用語編」その3 原田 広 26
- 『非文字資料研究』（旧『年報 非文字資料研究』）への寄稿について 34
- 主な研究活動 35
- Information 36



研究調査報告

『北九州市若松洞海湾における船上生活者の歴史の変容 ーオーラルヒストリーからのアプローチー』を刊行して

田上 繁

(非文字資料研究センター 研究員)

1 本書のねらい

本書は、「はじめに」で記しているように、長い日本の歴史の中で決して記憶されることも、記録されることもない、ほんの芥子粒みたいな短い期間にただ頭をもたげる人たち、船上生活者たちの生きざまをつづったものである。研究対象としたのは、明治中期（1890 年ごろ）から昭和 40 年代（1970 年前後）までの約 80 年間、筑豊炭鉱の興隆にともない、石炭の集散地として発達した北九州市若松洞海湾の船上生活者たちの歴史である。

九州の北東端に位置する若松（現 北九州市若松区）の港は、最盛期には数千艘もの大小の船舶で埋め尽くされていた。そのため、対岸の戸畑や八幡の町は若松から見渡せなかったという。ところが、現在では往時の若松港の賑わいはすっかり影を潜め、湾内に碇泊する船舶は、ごくわずかな貨物船と沿岸に繋留する海上保安庁の船ばかりである。このように洞海湾の景観は一変してしまった。小さな漁村にすぎなかった若松が、筑豊地方の石炭産業の展開とともに港湾輸送において急成長をとげ、わが国の近代化の一端を担う役割を果たしたこと、反対に、その後のエネルギー産業の転換、船舶の大型化、陸上輸



写真 1 ハシケの群れ

送の展開、近代的施設を備えた近隣港湾の発展などの理由により、瞬間に衰退していった歴史を追求することは、明治以降の近代化の問題を考える上でも、きわめて意義のあることと考えられる。

ところで、本書では、専ら文献資料に依拠していた

従来の研究方法を乗り越え、非文字資料の一つである船上生活を実際に体験した人たちからの聞き書きや、洞海湾の船上生活者に関する写真資料などを利用する分析方法を採用した。幸い船上生活を体験された方たちや、荷役会社、港運会社、造船会社、船食会社の経営者、さらには、子供たちが寄宿舎生活を送る若松児童ホームで指導にあたられた先生方からも貴重なお話をうかがう機会をえた。こうしたライフヒストリーとともに、若松図書館を始め個人が所蔵されている貴重な写真も収集、活用することができた。



写真 2 聞き書きの様式

本書は、第 1 部 論文編、第 2 部 資料編の二部構成となっており、さらに、第 2 部 資料編は、オーラルヒストリーと写真資料に分けられる。第 1 部 論文編は、「はじめに」「おわりに」と本論 5 章からなり、それぞれが全体的に関連性は持ちながらも、各章が独立した内容を有している。各章の結論を先取りするならば、以下のようになろう。

第 1 章の「洞海湾の変遷と港湾輸送」では、ハシケの生活者が身につけた、忘れ去られようとする技術の話や、荷役作業の時に海に落ちた「カイボタン」や「ニゴタン」（荷後炭。本書中では「二号炭」としたが、「荷後炭」と解釈した方が妥当であろう）という石炭拾いの話、北樺太から沖縄まで渡り歩くアンコ労働者、任侠道を身にまとう「ゴンゾウ」、文学・詩を志す「ゴンゾウ」

などの話を通して、多彩な船上生活者と港湾荷役労働者像が浮き彫りとなった。

第2章の「洞海湾若松港における船舶輸送」では、船大工から機帆船修理に生涯をかけた話、輸送用の小さな機帆船で、玄界灘の荒波を対馬に渡る船上生活者の話から、嵐の瀬戸内海をレーダーのない時代、頭に叩き込んだ海図と灯台だけを頼りに乗り切る機帆船夫婦のたくましが、よみがえる。

第3章の「洞海湾若松港における港湾荷役業」では、「ゴンゾウ」の船への石炭運搬の職人的技術、熟練技を習得した「ゴンゾウ」の技術伝習と賃金の決定構造など、仲仕の生々しい労働実態が聞き書きから伝わってくる。

第4章の「船上生活者の暮らし」では、船上で炊事する主婦の肩にとまる微笑ましい伝書鳩の写真から、緊急連絡を必要とする船上生活者の厳しさが伝わる。また船上生活の水の貴重さ、「ウロさん」といわれる日用雑貨を伝馬船で売り回る海上商人が、船上生活者を支えたこと。さらに大手の日本郵船、大阪商船、山下汽船などの食料を大量に販売する「船食」業者の活躍など、従来の歴史では記録されることのない、海の生活者の実像がいきいきと描かれる。

第5章の「船上生活と子供たち」では、揺れる船上で熱湯をかぶり火傷する子供たち、船上で遊ぶ子供たちの姿や海に落ちて亡くなる子供たちの悲劇が胸に迫る。このような船上生活の子供たちを船上の危険から救い、義務教育を継続させるため、陸上の寄宿舍・若松児童ホームを設置し、それによる船上生活の両親との別れなど、近代化は子供たちの生活にも大きな変化をもたらした。さらに児童ホームで寄宿舍生活を送る子供たちを懸命に支える保育士の活動が、今はじめて語られる。

以上、これら貴重なそれぞれの体験談は、忘れ去られつつあるかつて洞海湾若松港で暮らした人々の多様な生きざまを、現在に伝えている。

2 オーラルヒストリーと写真資料からしか見えてこないもの

文献資料に限界があり、あるいは、文献資料そのものが伝存しないといった事態においては、非文字資料の重要性が一段と増してくる。本書でも文献資料では解明できない、つまり、非文字資料でしか解明しえない歴史事象がいくつもある。そこで、いくつか事例を挙げて確認してみよう。

①みんなで遊んで、父がご飯食べるときに、5人兄弟だったんですね。で、こう頭数数えて、「1人

足りん」ちて、……船と船がこうぶつかって、傷が付かんように、ペンドルっていってですね。タイヤのようなこう板がね。そのペンドルの、こうチェーンがあるでしょう、大きな。それをトモ（艀）からオモテに来よって、これにつまずいて、海に落ちたんですよ。……もの凄いその弟を可愛がってくれとったおいちゃんが、もう、みんなが通った後に通って、その人に引っかかって来たんですよ。[元船上生活者 渋田幸子さん。本書 p.79～80]

①のように、船上生活を送った話者3名の3名ともが、弟や妹を船上での事故で失っている。辛い過去の出来事であるが、いずれも涙ながらに語っていただいた。

②海上の生活の人がみんなね、子供が海に落ち込んだり、学校に行かれんとか、そういうのを考えられて、こういうとこの施設に預けて、土曜、日曜日に帰って、ほして、船に帰るちゅう。だから、わたし来たとき何人か子供おりましたけど、「船に帰る」ちいいよったですね。……やっぱりいろいろ問題があったんですよ。そのときね、双子がおりましたですね。……1人の子は、双子の1人はですね、全部丸はげで。そして、火傷のケドロ（ケロイド）のあれですから、つるつるでしよ、皮が。……船が燃えて、火事だったですね、船底が。そのときに2人の子供が這い上がって来たち、やっぱり生命力が強かったんでしょね。やっぱりまだ生きていかな使命もあったでしょう。2人が這い上がって来て、助かったんです。[元保育士 中井陽子さん。p.109]

③やっぱり帰りたいから、(桟橋から)大きな声で「おーい」って、船の名前呼んで、「おーい」つちいわないけん、もう、聞こえないですよ、小さいから。「おーい」て、仕舞いには、もう4回ぐらい呼んでも、全然分らないから。もう、わたし帰るちゅって(笑う)、帰りよった。……だから、食事を、もう(船に)帰るときは、「食事要らないから」つちゅって帰るんですよ。(児童ホームに戻って来て)「すいません」つちって。(炊事の方が)「もうないから」って。仕方がないから、「なんか余ってるのがあるから、それでなんか作ってあげるね」って、材料の余ったのでなんか作ってもらったりして。[元船上生活者 田上キサ子さん。p.82～84]

④子供もAからZまでおりますから。全部取り方が



違いますから。おなじことでいって子供が分かる訳ないんですから。やっぱり、そのケースバイケースで話してあげないと。そこが一番むずかしいですから、特に、船の関係ではご父兄がおられますからね。やっぱり三位一体、わたしゃあよく三位一体というですけど。「子供とそれからご父兄の方と職員との連携がやっぱりうまくいってないと、三位一体は崩れるよ」と、職員によくいってましたけどね。[元保育士 佐々木偉昇さん・和代さんご夫妻。p.122]



写真3 若松児童ホームの絵

②・③・④は、若松児童ホームで寄宿舎生活を送る船上生活者たちのエピソードと、指導にあたる保育士の教育のあり方を知ることのできる話である。いずれも先生たちの子供たちに向ける眼差しの優しさがひしひしと伝わってくる。

⑤箱にですね、箱にちょっと穴みたいなんがあって、これが海に落ちて行く。これが、高月（石橋英子さんの旧姓）のおばちゃんが炊事しよところと思うんですよ。……（居間は）ないです、上には。そやけ、上と1部屋あるんですよ。ご飯食べたり。で、横にちょっとお風呂があるんですよ。それからちょっとこう、中にちょっとカマクラみたいなね、いうたら、そういうところに、トン、トンと4、5段降りて、また、階段を上がる。そこで寝る。[元船上生活者 洪田幸子さん。p.94～95]



写真4 船上の部屋でくつろぐ少女

⑥父がすごい好奇心旺盛な人だったので、沖に出たときに、いろんなトラブルなどが起こったときに、岸にその拠点を、鳩の拠点を作っててですね、連絡用にしたらいいという発想のもとに始めたんですけど。でも、結局は、鳩が実際に船に棲み付いているから、外で飛ばしても、どこにも行かないんですよ。[元船上生活者 石橋英子さん。p.88]



写真5 伝書鳩を肩に乗せて炊事する母親

⑤と⑥は、いずれもハシケの部屋の位置や炊事を行う船縁の様子など、船の構造や機能を述べた話として注目される。また、伝書鳩を肩の上に乘せて炊事を行う場面が撮影されているが、この伝書鳩は緊急時に陸上と連絡を取る目的で飼っていたものである。ところが、鳩が船に棲み付いてしまったのであまり効果はなかった模様である。

⑦お父さんが買って航海に行くでしょう。……生活ができないから。それで、結局、あれやこれやら、ウロさんから買って、そして、魚とか売りに来よった。魚とかね、野菜とかも。ほいで、もう、時間があるときは、オカに上がって、宮丸の市場とかで買う。あと、急に要るときなど、結構いいのを持って来よったですよ、魚とかでも新しいのを。それをしないと、食事ができないでしょう。だから、それを仕入れて、そして、それを持って行きよった、航海に。[元船上生活者 田上キサ子さん。p.93～94]



写真6 海上商人の「ウロさん」

⑦のように、海上において伝馬船で商売を行う「ウロさん」＝沖ウロと呼ばれる海上商人がいたので、船上生活者たちは、食料を始め日用雑貨を購入することができた。長期間の航海のときも「ウロさん」から必要な日用雑貨を買い入れた。また、時間的な余裕がある場合は、陸に上がって市場で買い物をすることもあった。

⑧材木から、だから、あそこに来たのはね、なんかね。沖の彦島に持って行く石炭も持って来たった。鋼材もね。……うん。対馬から鉱石運びよった。うん。鉱石を。「こんだ、いい仕事ありますよ」ちゅうんで、材木をやめて。対馬までね、鉱石のなんかね。……うん。ダイナマイトとかなんとか積んで行きよった。[元船上生活者 越智俊充さん・頼子さんご夫妻。p.98～99]

⑧では、材木、石炭や鋼材などを運搬した話が語られる。中でも、対馬までダイナマイトを運んだ話には驚かされる。ただ、玄界灘の荒波に抗しきれず、対馬への渡航は1年程でやめることになった。ご夫妻が口を揃えて、厳しい航海の様子を語っていたことが印象的であった。

⑨（ゴンゾウは）もちろん地元の人もしらっしゃるんですよ。地元の方が大半なんですけど、犯罪を犯して、この町に流れ込んで。要するに、時効になるまで姿を隠してるとかね。そういう方たくさんいらっしゃいました。……あるいは、……わたしたちが青年のころ、「安田三兄弟」って、ボクシングの兄弟がいたんです。で、その人、長男だったんです、この人は。詩人ですね。それこそ、火野葦平さんの友だちなんです。その方が、やっぱりあの北樺太から沖縄までアンコ（大阪方面での港湾荷役労働者の名称）、アンコで歩きながら、詩をこう詠んでた。結局、若松に居ついたんです。はい。そういう方もいらっしゃいました。ええ、もうゴンゾウ、立派なゴンゾウでした。[荷役会社社長 中山弘文さん。p.136]

⑩（昭和）38年当時、（サラリーマンの）初任給がどのくらいかなあ。（こちらの労働賃金は）1万3千円くらいですか、その当時で。倍くらいですかね。倍といわん給料取ったね。もちろん、ほかでなんの保障もないんでしょ。事故があれば自分で払わないけん、保険もなにもないですからね。倍以上の

賃金払ったんじゃないかと。だから、港湾の作業に従事しようとする人は結構当時多かったです。……高倉健さんなんかも学生時代、あの人、エッセーに書かれてますよ。……（ハシケについては）われわれの場合は免許制ですから、荷役にしても沿岸荷役、本船荷役、船内荷役とか、あるいは、一般港湾運送事業で一種、二種、三種と仕事の中身によって別の事業になってるんです。ハシケは三種事業で、当時はハシケだけの免許業者も多かったですよ。港がまだ整備されていないので、全部沖荷役ですから、本船にね。だから、ハシケが不可欠なんです。……だんだん時代とともにね、荷役形態が変わってきましたからね。……ハシケ自体は自分では運行できないから、タグ・ボートに引っ張ってもらうので、結構厄介なんです。[港運会社会長 岡部秀年さん。p.143～144]



写真7 石炭荷役を行うゴンゾウたち

⑨と⑩からは、当時の時代性やゴンゾウの気質、さらには、ゴンゾウの賃金の実態など興味深い事実がうかがわれる。危険と背中合わせであっても、高額な賃金を獲得できるゴンゾウの仕事を目指して全国から多くの人たちがやって来た。その中に、学生時代の高倉健も含まれていたようである。一方、ハシケについては、荷役業務には不可欠の存在であったが、時代とともに荷役形態が変化してくると、その役割も終えることになる。とくに、1965年（昭和40）に港湾労働法が公布されて以来、ゴンゾウの立場や生活は一変するが、ハシケで船上生活を送る人たちも下船して陸に住むことを余儀なくされる。洞海湾が変貌をとげる契機となったのは疑いない。

⑪藤ノ木新棧橋から上（かみ）の方に、木造船ですよ。運び出して来よった。いわゆる「花と龍」の時代ですね。それが石炭がまったくなくなって、今度



は八幡製鉄、鉄の町、大型本船が入って来るわね。うん、八幡製鉄の製品どんどん積み出しよった。鉄の町に変わったんよ。石炭の町、洞海湾から洞海湾は鉄の町に変わった。……若戸大橋からわたし洞海湾を見下ろして見た。がらん、がらんですよ。船の姿が見えん。で、当然ね、われわれ船の病院、船のお医者さんも数が減った。[造船会社社長 稲益敏幸さん。p.149]

⑫この仕事自体(船食会社)は、戦前からあります。(昭和25年ごろは)朝鮮戦争がありよった。こっから持って行くのが近いやないですか。それで向こうで食料がとられないから、「こっちで往復分積んでいかないかん」ちゅうな感じ。……特殊な仕事ですからね。それでこれ、船は免税品とかは積めるんですよ。空港で免税品買うじゃないですか、安い。あれと一緒に免税があるんです。そやから、権利を持たところじゃあ太刀打ちできん訳なんですよ。[船食会社社長 中野種洋さん。p.154]

⑪や⑫からは、造船所や船食会社の目を通した洞海湾の景観の変遷を思い浮かべることができる。

このように、元船上生活者を始め、荷役会社、港湾会社、造船会社、船食会社などの関係者、さらには、若松児童ホームの先生方が語る上記のような内容は、文献資料では把握することは不可能であり、オーラルヒストリーや写真資料を通してのみその実態が明らかとなる。

3 本書への反響

本書の評価については、学会での書評、元船上生活者や読者などからいただいたお手紙の文面などによってうかがい知ることができる。学会の書評では、日本オーラル・ヒストリー学会と日本民俗学会で取り上げられている。それぞれ、その一部分を引用して紹介すると、次のようになる。なお、引用に際しては、省略した部分があることを断っておきたい。

『日本オーラル・ヒストリー研究』第11号、日本オーラル・ヒストリー学会、2015年9月]

本書は、その船上生活者、港湾荷役労働者によるオーラル・ヒストリー、写真記録を通して描かれた日本民衆史である。16名の元・船上生活者たちの語りと、巻末48ページにわたって掲載された写真資料が失われた風景を蘇らせてくれる。

人情味あふれる船上生活者の家族の営みが鮮やかに

語られるが、中で印象的なのは、海に落ちた子どもの死をめぐる悲痛な思い出が、涙とともに口々に語られることである。子どもたちをその危険から救うため陸上の寄宿舎、若松児童ホームが作られた。こうした語りから、戦後日本の成長を支えた人々の歴史の一断面が立ちあがってくる。

『日本民俗学』284、日本民俗学会、2015年11月]

報告書では、港湾労働者として舢舨や機帆船を操縦し、石炭や材木、ダイナマイトを運んだ人々とその家族の暮らしに注目する。民俗資料としては、水上生活者の暮らしを記録すること自体、画期的だが、彼らと深く関わった荷役会社、港湾会社、造船会社、船食会社など周辺の人々、さらには水上生活者の子供たちを預かった児童ホームの人々への取材をすることにより、水上生活者の生活世界を立体的に描くことに成功した。

本書が生き生きと地域生活を描くことができた最大の理由は、調査の中心人物にあるのではないか。彼は若松で生まれ育ち、若松の暮らしをリアルに体験している。よそ者が調査地に出かけ、フィールドワークをしたのとは、やはり作品の迫力が違う。たとえば、調査報告書『石炭が拓いた北九州の産業と文化』(CDI、2010年)などの労作もあるが、この報告書には完敗。評者もよそ者として若松に調査に出かけるが、素直にそう思った。

両書評とも多分に過大評価がなされていると思われるが、書評の内容は、私たちの制作意図や目的を正確に捉えられている。紹介していただいた両学会には心より感謝したい。続いて、元船上生活者や読者などからの書簡をいくつか紹介してみよう。ここでも、一部省略した箇所があることを断っておきたい。

①次男坊から「凄い本が送られてきたよ！お母さんの生きた証・自分史をスタッフが著作してくれたんやね。体験した者と先生達の足と耳とで出来上った本」と喜んでくれました。私も古稀を迎え、後何年、洞海湾の心地よい潮風を腹一杯吸い風に吹かれる事が出来るやらと思う時もありますが、精一杯楽しい日々を過ごしていこうと思っています。
[元船上生活者 浜田幸子さん]

②感謝、感動、言葉では云い表わせない気持ちで一杯です、まず第一に仏壇に供え嬉しい報告を、なぜなら、母の写真が裏表紙に出して頂いていたので真っ先に。三冊も送って頂いたので、早速読ま

せて頂きました。大学の先生につたない感想を述べるのを躊躇しますが、素晴らしい内容でとても充実していて、海上生活を送られていた人がもし読まれたなら、皆様感動すると思いました。[元船上生活者 石橋英子さん]

- ③素晴らしい研究資料の完成、皆様のご苦勞心より感謝です。船上生活を経験した方達、皆んなの喜びです。

あの分厚い資料を頂き、声を大にして、皆さんに報告させて頂きたい所ですが、……ふだん記の創始者である、橋本先生が生きていらして、この資料をご覧になったら、どれ程喜ばれたであろうと、松岡さんからお葉書届きました。すごく意義のある資料、喜びと感謝を拙い文章で表わすのはとても無理な様です。[元船上生活者 石橋英子さん]

- ④洞海湾の船上生活者の記録興味深く、知らなかった生活、消えてしまった生活をしっかり読ませて頂きました。私自身炭礦の町・水巻に生れ、遠賀川を眺めた小学校、そして社会に住い、堀川沿いを通っての高校生活がありましたから、懐かしさも加わっているのでしょう。
ふだん記に携わり、「老人はテープレコーダーだ、昔の記憶はしっかりと残っている」と言われていた創設者の橋本義夫氏の言葉につながるものを感じています。[「ふだん記」関係者 川原洋子さん]

- ⑤早速ページを開き「まえがき」を読んでびっくりいたしました。私はこれまで歴史の解明には文献史料が唯一の方法と考えておりましたが、先生の音声の聞きとりから写真映像までを自在にとり入れる手法を拝読し感銘を深くしました。
更に同級生も非文字資料の一つになっていて巾広い人脈とお人柄がしのばれる研究過程でありました。[郷土史家 千葉勝衛さん]

- ⑥此の様に膨大な資料の集積と稀少な古老からの経験談の採取で詰まった尊い御本を一通り読んで終りと云う訳には参りません。これからの私の活動の上にも何らかの形で取り入れさせて頂き度く存じます。……今回先生と研究者の皆様で上梓された、此の尊い報告書は、民俗学的な見地からも、無類な分野の生活歴史遺産として脚光を浴びるに違いないと強く信じています。近代化に労を提供

した船上生活者の人々には、軍艦島の人達とどこか似ていて、ロマンが有りたくましいですね。

舂のわきの小さなつり下げられた箱の下から何やら、空中で舞いながら海面に吸い込まれて行く様は、少年の心にしっかり刻みこまれていましたが、行為者御当人方から、時を越えて実況して下さったのには、深い謎が解けた思いが致しました。[演劇家 りゅう雅登さん]

- ⑦私もこの数年、日本の伝統的水上生活者の研究に取り組んできました。そして思うのは、関係者でないと入り込みにくい部分があるな、ということです。洞海湾の報告書は田上先生の地縁・血縁あつての成果だと感じました。今後ともご教示いただければ幸いに存じます。[民俗学研究者 厚 香苗さん]

お手紙のすべてを紹介することはできないが、ライフヒストリーを語っていただいた方々、演劇の題材として取り入れることを考えている演劇家、同じ水上生活者の研究を精力的に進めている研究者など多くの方々から貴重な感想を含めたお手紙を頂戴した。現在、本書の研究成果を基礎に第2期の共同研究として東京湾の船上生活者の研究を行っており、お手紙に認められたご助言やご意見を参考にしながらさらに調査研究を推進していきたいと思っている。

最後に、本書の目的は、日本近代をエネルギー面から支えた北九州筑豊炭田の歴史を、従来の石炭産業史や炭鉱労働関係史でなく、石炭積出港として発展した若松港のハシケ・機帆船の船上生活者、さらには「ゴンゾウ」といわれた港湾荷役労働者の生活の記憶を発掘、記録することにより、近代炭鉱史の流過程に携わる人々の生活史を通して、その歴史像を豊富化することにあつた。そのために、このような史料のほとんど残らない歴史を明らかにするべく、人々の記憶の再生としてのオーラルヒストリーの方法を意識的に追求し、また図書館や個人が所有する写真資料を収集し、それらを歴史叙述に生かしたところに本書の意味があるのではなかろうか。若松洞海湾の船上生活者の歴史は、石炭輸送として日本近代産業の底辺を支えるばかりでなく、これらの船上生活の人々の生活史を通して、時代ごとの固有の歴史が一人ひとりの記憶に刻み込まれている。これが日本の近代から現在への歴史の一断面である。本書をまとめてみて、そこから、私たちは新しい近代史を再発見できると確信するに至ったのである。



研究成果報告

ローマ、ヴァージ、ピラネージ

鳥越 輝昭

(非文字資料研究センター 研究員)

このたび完成した『18世紀ヨーロッパ生活絵引』は、18世紀のロンドン、パリ、ミュンヘン、ウィーン、ヴェネツィア、ローマに暮らした人々の生活ぶりを、当時に制作された絵画や版画を素材として解説し、図版に見られる事物などの名称を明らかにしたものである。絵引の制作に当たっては、執筆の前段階として、図版の探索と選別作業も伴った。図版の探索から執筆までの全工程について、パリは熊谷謙介先生が担当し、ミュンヘンとウィーンはブッヘンベルグ先生が担当した。わたくしの担当したのは、ロンドン、ヴェネツィア、ローマの3都である。

わたくしが絵引の制作過程で得た大きな収穫のひとつが、版画家ジュゼッペ・ヴァージ (Giuseppe Vasi, 1710-1782) の発見だった。ヴァージは、この時代のローマの様子を詳細に描いた版画をじつに238点も収める『ローマ古今の偉容 *Delle Magnificenze di Roma antica e moderna*』(1747-1761)を残してくれていたのである。

ヴァージは、シチリア島の町コルレオーネの出身である。この小さな町は、小説と映画の『ゴッドファーザー』(小説1969; 映画1972; 1974; 1990)のなかで主人公一家の出身地とされた場所で、映画でも一家が里帰りしたときの町の様子が映し出される。興味深いことに、イタリア語版のウィキペディアでこの町の紹介を見ると、町出身の有名人としてマフィアの親分たちの名前が並んでいるから、小説と映画がここをドン・コルレオーネ一家の出身地にしているのも宜なるかなと思える。しかし、町出身の有名人のなかにジュゼッペ・ヴァージの名前はない*。イタリアでも、一般にはヴァージは忘れられてしまっているらしい。

ヴァージは技量のすぐれた版画家だった。上記の大作も残した。18世紀当時には、ローマの景観を描く版画家として人気もあった。それがなぜ、後世には忘れ去られてしまったのか。答えは、この版画家が同時代のローマの様子を忠実に描き出した、まさにそれゆえであった

だろう。後世は18世紀のローマにほとんど関心を持たなくなつたのである。

ヴァージとは対照的に後世の人たちに関心を持たれつづけたのが、ピラネージ (Giambattista Piranesi, 1720-1778) である。ピラネージはじつはヴァージの弟子である。ピラネージは、ローマ景観版画の第一人者だったヴァージの工房で景観版画の作り方を学び、のちに独立し、やがて人気の点で師をしのぐようになった。ピラネージが世に知られるようになったのも、ローマ景観を描き出した銅版画によってであり、それは『想像の牢獄画集 *Carceri d'invezione*』(1745-1750)が注目される以前のことだった。

ピラネージの人気のヴァージを上回るようになった理由のひとつは、版画の表現法にある。ピラネージはヴェネツィアの出身で、ローマでしばらく修行したのちに故郷に戻り、そこでティエポロやカナレットのようなヴェネツィア派の先輩画家たちの絵画から、明部と暗部を連続的に表現する技法を学び、それを銅版画に応用した。ピラネージの版画は、景観の正確な再現を旨としたヴァージの版画とくらべて、ドラマティックな明暗表現の点で勝り、それが世の嗜好に合致したのである。しかし、ピラネージの画業が後世に生き延びた理由はもうひとつある。それは、ピラネージが18世紀当時のローマを描くことに関心を持っていなかったことである。

ヴァージとピラネージが、同じ素材を取り上げた版画をくらべてみると、ふたりの違いがよく



図1 Vasi, Chiesa di S. Maria a Trevi. © 2008 University of Oregon.



図2 Piranesi, Veduta della vasta Fontana di Trevi anticamente detta l'Acqua Vergine. Wikipedia Commons.

わかる。ひとつは、ローマの名所「トレヴィの泉」を描いたものである〔図1、図2〕。

ヴァージとピラネージの違いは、画のタイトルにすでに明瞭にあらわれている。おもしろいことに、ふたりとも「トレヴィの泉」という画題はつけていない。ヴァージは画を『トレヴィの聖マリア教会 *Chiesa di S. Maria a Trevi*』と名付けた。ヴァージのいう「トレヴィの聖マリア教会」とは、「聖マリア・イン・トリヴィオ教会 *Chiesa di Santa Maria in Trivio*」のことで、画中では、泉の左奥に小さくファサードを見せている。画題の付け方には、一面で、18世紀当時ローマを支配していたローマ教皇庁への配慮が感じられるし、もう一面では、ヴァージ自身が18世紀当時の「近代」に関心を持っていたことが窺い知られる。この画の素材になっている建造物を見ると、泉そのものはヴァージが描いたころは完成間際だったし、背後の宮殿は1730年代の完成、一番古い聖マリア・イン・トリヴィオ教会も1570年代に完成したバロック様式である。ヴァージは、彼にとっての「近代ローマ」の「偉容」を描き出そうとしているのである。

ピラネージの画題の付け方は、ヴァージとは対照的である。ピラネージは画を『「トレヴィ」と通称される「処女の水道」の大泉の透視画法による景観 *Veduta in prospettiva della gran Fontana dell'Acqua Vergine detta Trevi*』と名付けた。画題にいう「処女の水道」とは、古代ローマにこの場所まで、はるばる飲料水を届けていた水道の名前である。「トレヴィの泉」は、この古代の水道を18世紀に再建し、その到達点につくった泉である。画題のこの付け方を見ると、ピラネージが眼前の泉の背後に古代ローマの水道を重ねあわせているだけでなく、関心の中心が、眼前の泉よりもむしろ古代ローマの水道の方にあることがわかる。

この2枚の版画よりもさらにふたりの違いが明瞭に見られるのが、「フォロ・ロマーノ」を描いた版画である〔図3、図4〕。

ヴァージが画の主要な素材としたのは、当時はフォロ・ロマーノにあった「聖マリア・リベラトリチェ教会」(＝解放

者聖マリア教会)である。ヴァージは、このバロック様式による、彼の時代には「近代」の建物を画の中央に置き、画題も『聖マリア・リベラトリチェ教会 *Chiesa di S. Maria Liberatrice*』とした。

それとは対照的に、ピラネージは、ヴァージとほぼ同じ場所を描いた版画にまったく別のタイトルをつけた。ピラネージがつけたタイトルは *Veduta del Sito, ov'era l'antico Foro Romano*、日本語に直訳すれば、「かつて古代ローマのフォロ・ロマーノがあった場所の〔現在の〕景観」という意味である。ピラネージのころ、かつての「フォロ・ロマーノ」は「雌牛の野(カンポ・ヴァッチーノ)」と呼ばれ、文字どおり、牛や羊の放牧地として使われ、古代ローマの遺跡は半ば地中に埋もれたまま顧みられなかった。だがピラネージは、眼前の光景の背後に、古代ローマの様子を重ね合わせているのである。

しかもピラネージは、画のなかで聖マリア・リベラトリチェ教会を左隅に押しやり、ファサードを半分切り落としている。この建物を無視しようとしたのだといってよいだろう。そのかわりに目立たせてあるのが、左から3分の1あたりに立っている3本の円柱である。これは古代ローマ時代の神殿の残骸である。さらにピラネージは、この版画を「絵引」化して、下端に画中の事物の解説をつけているのだが、画のなかの細流については、それが古代ローマの大下水道「クロアカ・マクシマ」に流れ込んでいると書いたり、画の中央あたりに見える円筒形の建物について、古代ローマ時代にロムルスとレムスが発見された場所だと書いたりするのである。

ヴァージとピラネージの死後80年が過ぎるころには、新興のイタリア王国政府をはじめとして、多くの人々の関心は、栄光の古代ローマに向かうようになった。その思潮のなかで、放牧地だった「フォロ・ロマーノ」は発掘されてゆき、邪魔になった聖マリア・リベラトリチェ教会は破壊された。おなじ過程のなかで、その教会を画題の中心としたヴァージも忘れ去られたのである。

聖マリア・リベラトリチェ教会が破壊される一方で、古代の神殿は完全に掘り起こされていった。ピラネージの画『かつて古代ローマのフォロ・ロマーノがあった場所の〔現在の〕景観』は、その過程を先取りしていたことになる。時代の関心が、かつてのピラネージの関心のあり方に追いついたといってもよいだろう。

*本稿の校正段階でイタリア語版ウィキペディアにヴァージの名が加筆されていることがわかった。



図3 Vasi, *S. Maria Liberatrice*.
en.wikipedia.org.



図4 Piranesi, *Veduta del sito, ov'era l'antico Foro Romano*.
©Trustees of the British Museum.



研究成果報告

『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』刊行に寄せて — 渋沢敬三の「絵引」からヨーロッパ都市景観図分析まで

熊谷 謙介
(非文字資料研究センター 研究員)

2011 年度から開始されたヨーロッパ班の研究成果として、『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』をまとめることができた。編集・校正等に多大な時間がかかり、関係者の方々には大変お手数をかけてしまったが、研究資料がほとんどないところから始まったプロジェクトの第一弾として、非文字資料研究の華とも言うべき「絵引」を作成できたことに、まずは満足したい。

私の専門はフランス文学であるが、同時に表象文化論という枠組みでも研究を行ってきた。「表現」ではなく「表象」という概念を用いることで、文学・芸術作品のうちに作者の言いたかったことを探るよりむしろ、儀礼や図像といったものに文化や社会の意識されざる「表象」を見るという立場である。この意味で、表象文化論は非文字資料研究と類似しており、フランス視覚資料の分析に寄与すべく、鳥越輝昭代表が主宰する「ヨーロッパ絵引」研究に参加することになった。

今回上梓した『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』の内容については、本を実際に手にとって確かめていただきたい。ここではその前史となる、渋沢敬三により発案された「絵引」のコンセプトを、どのようにヨーロッパ絵画に適用するか、その試行錯誤について記していく。今回の出版物では言及できなかった、18 世紀フランスが生んだ金字塔『百科全書』との比較から、この問題を考えていきたい。

*

フランスをフィールドとする研究者の間では、渋沢敬三は、フランスから株式会社制度を取り入れた渋沢栄一の孫として知られている（渋沢クローデル賞という日仏文化研究成果に贈られる賞が存在するくらいである）。あるいはこの実業家一族の遠縁に当たる文学者、澁澤龍彦が著名な存在であろう。

知ってのとおり、渋沢敬三は「絵引は作れぬものか」（1944）の中で、字引があるように、絵を事項とする「絵引」というものが作れないかを模索している。その出発

点にあるのが『信貴山縁起』、『餓鬼草紙』といった古代絵巻に描かれた庶民の日常的な生活風景であり、主となる物語とは別の細部の数々であった。福田アジオは、「字引に対して、絵を窓口にして事項を調べる絵引きを作るという発想の独創性は高く、世界的に類例を見ないものであった。しかも利用する図は辞書用にわざわざ描き出した図像ではない。辞書の 1 種類として、図を描いてそれに名称を付するという方式は、日本だけでなく、世界的に語学の辞書を中心に多くの例を見ることができ、それらは必要な事物のみを辞書用にスケッチ風に描いているものである」⁽¹⁾ と、「絵引」と辞書に見られる「図解」との違いを説明している。実際、渋沢敬三の構想は『絵巻物による日本常民生活絵引』（1965-68）となって結実するが、絵巻の複写を土台として、着物や道具一つ一つに番号を付して作成されたのである。このような方針を採ることによって、個々の事物を抽出するのではなく、それぞれの事物どうしの連関を示し、またまわりの状況でその事物がどのように使われていたのかを明らかにしたといえよう。

こうした渋沢の構想を知ったときに、私はディドロなど 18 世紀のフランスの啓蒙主義者たちが編纂した『百科全書』を思い起こした。『百科全書』は大判で 17 巻にわたる本文だけでなく、3000 枚を超える図版の巻が 11 巻にも及ぶ、文章・視覚資料の両面にわたる世界把握の試みであった。図版の巻は日本独自の編集で『フランス百科全書絵引』という題で平凡社から出版されており⁽²⁾、また図版は大阪府立図書館のサイトで見ることもできるようになっている⁽³⁾。前者の「刊行の言葉」にあるように、ディドロをはじめとする百科全書派は、「《百科全書》の項目を執筆すると同時に、画家および彫版家に綿密な指示を与え、熱意をこめて図版解説（エクспリカシオン）と部分名称（ノマンクラチュール）を書き上げ、ここに 3000 点を越える銅版画が成ったのである」⁽⁴⁾。

但し、ともに「絵引」という名で称されていても、『百科全書』の図版と渋沢が考える絵引は異なっている。例えばここに掲載した「吹きガラス」の項の図版を見ると、上部は職人たちが棒やるつばなど様々な道具を使っている様子が描かれているが、下部にはガラスの材料が入ったつばを炉に入れる機械が、分解された形で示されている。福田が述べたように、『百科全書』の図版はあくまで辞書のために抽象化・再構成された図版であって、分解された機械のパーツに特徴的なように、そこに注がれる視線は、仕掛けを見てみたいという「理性」のまなざしということができる。ここに「世界は全く解説が可能な、開かれた大きな書物」⁽⁵⁾であるという、フーコーが示したような古典主義時代の知の枠組み（エピステーメー）を確認することもできるだろう。そこには本来は存在していたに違いない、民衆の猥雑な姿に代表されるような不透明な厚みは存在しなかった、とすることができるかもしれない。



『百科全書』「吹きガラス」の項の図版
(神奈川大学図書館所蔵)

今回の『18世紀ヨーロッパ生活絵引』では、渋沢敬三の「絵引」の方針にのっとり、事物の説明のために描かれた図版ではなく都市景観画を選択することで、そこに描かれた民衆の生活風景の細部の一つ一つに、またその調和に視線を注ぐことができたように思う。何回も何回も繰り返し見ていくうちに、「これは洗濯女だ！棒でたたき洗いをしている」などと、そのたび新しい発見があるのは驚きであった。今まで絵画を形式や手法を中心にすることが個人的には多かったが、描かれている服装や習俗といった内容に「ベタに」注目していくことは

新鮮だった。

調査を終えた今、次回以降の企画である「ヨーロッパ19世紀前半生活絵引」につなげる形で反省点を示して筆をおきたい。まず、分析の対象の多くが油彩画となったため、細部については何が書かれているか判然としないケースが見られた。所蔵されている美術館に行って現物を見たから分かったものの、画集等で見る限りでは判別できなかったものもあった。渋沢敬三も絵巻をそのまま使うのではなく、「画家で且つ民俗学者である橋浦泰雄さんに交渉して、絵巻物各種を一巻一巻丹念にアチック同人で検討してはその決定に従い同君にブラックアンドホワイトで一つ一つ複写して」⁽⁶⁾もらったことを伝えている。こうした複写という作業の採用が現実的には難しくても、部分拡大や図版のデジタル加工によって、細部を明快な形で示すことを今後の課題としたい。

第二に、今回は都市景観画にしばって分析したが、民衆の風俗等をよく示す図版を参考付録としてでも掲載すべきであったということである。私が担当した図版解説では、18世紀の作家メルシエの『タブロー・ド・パリ』をたびたび引用した。この著作は『十八世紀パリ生活誌』として翻訳されているが、図版が多く挟み込まれている。こうした図版も参考資料として挙げていれば、より濃密な、民衆の生活の息遣いが伝わってきたのではないかな。

今回、絵引という形で18世紀のヨーロッパの都市生活を紹介することができた。今後、同時代のヨーロッパ諸地域の間での、さらには日本やアジアの人々の生活との比較検討を、技術史や比較都市論などをふまえながら行いたい。地域を越境するだけでなく美術作品と民俗資料の間を往還することで、非文字資料研究にいくらかでも寄与できれば幸いである。

【注】

- (1) 福田アジオ「図像資料としての素人絵——生活絵引き編さん資料としての可能性」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、2005年、一頁。
- (2) ジャック・ブルースト監修・解説『フランス百科全書絵引』青木国夫 他 訳、平凡社、一九八五年。
- (3) 大阪府立図書館—デジタル画像 フランス百科全書 図版集
<http://www.library.pref.osaka.jp/France/France.html>
- (4) 注(2) 前掲書、四頁。
- (5) 注(2) 前掲書、十四頁(ジャック・ブルーストによる序文)。
- (6) 渋沢敬三「絵引は作れぬものか」『祭魚洞樵考』岡書院、一九五四年、六二〇頁。



ヴェーニングのバイエルン公国版画集成のこと

ステファン・ブッヘンベルゲル
(非文字資料研究センター 研究員)



図1 版画家ミハエル・ヴェーニング
(1645-1718) (Wikicommons)

わたしはミュンヘン育ちである。わたしの両親の家にも祖父母の家にも、部屋の壁には、ミュンヘンの市場を描いたこの版画が掛かっていた。



図2 M・ヴェーニング『ミュンヘンの市場 Der Markt zu München』
(Wikicommons)

版画の後景に偉容を見せる聖母教会のようなランドマークのいくつかは、わたしには馴染みのものだった。けれども、有名なグロッケンシュピールのついでに

新市庁舎のような建物は描き込まれていないから、この版画はかなり古いものなのだろうと思っていた。

『18世紀ヨーロッパ生活絵引』の編纂プロジェクトにかかわるようになったときのわたしの驚きを想像してみてほしい。この版画は、18世紀初頭というわりあい新しい時代に作成されたものだったし、なんと、バイエルン公国をいわば目録化して見せるおよそ850点の版画集成のなかの1点だったのである。版画集成を作成したのは、高名な版画家ミハエル・ヴェーニング (Michael Wening, 1645-1718) だった。

ヴェーニングは、1645年にニュルンベルクに生まれた。父親バルタザール・ヴェーニングは豚肉屋だったが、ミハエルは家業を継がず、版画家になった。彫版技術をどこで身につけたのか正確にはわからない。最初の版画作品は父親と名付け親の肖像画である。1668年にヴェーニングは故郷の町から逃げ出さなければならなくなった。妻でない女性に子供を産ませてしまったからである。当時、これは重大な犯罪だった。逃亡した先がミュンヘンである。

バイエルン公国の宮廷で版画家の職を得るまでは何年も苦労つづきだった。ヴェーニングは、その間にプロテスタントからカトリックに改宗し、1671年にはようやく結婚もした。1679年頃には、ヴェーニングは経済的に幾分成功しはじめていた。フェルディナント・マリーア選帝侯が死去したのち、後継のマクシミリアン2世エマヌエル公の統治下で、宮廷版画家の職(俸給付き)を得たのである。このマクシミリアン2世エマヌエル公は、父公より冒険心に富んでいたから、ヴェーニングの画才は、たとえば対トルコ戦争(1683-1699)のような軍事行動や戦勝を描く機会を豊富ににあたえられた。公は自分の功績を版画に記録させたからである。ただし、ヴェーニングは、これらの出来事を目撃したことは一度もなく、他の画家たちのスケッチを使って戦報を版画化したのである。

選帝侯の周囲の出来事を版画にするのとは別に、ヴェーニングはバイエルン全土の地誌的な版画を作成することにも関心を持つようになった。これは、オーストリアを描いたゲオルク・マティアス・ヴィッシャーや、ヨーロッパ各国の首都を描いたマテウス・メリアンの先例にならったのである。1696年に、ヴェーニングは、バイエルン公国の4つの行政地区を目録的に描き出す任務を与えられた。ヴェーニングの大作『バイエルン公国の歴史的地誌的描写 *Historico-topografica descriptio Bavariae*』の第1巻が印刷されたのは1701年のことである。それは、ミュンヘン地区を目録的に記録したものであった。もちろん、このころになるとヴェーニングはひとりきりで彫版をおこなっていたのではなく、数名の彫版師たちを助手に使っていた。ここにも、彼が経済的にも芸術家としても成功していたことが見て取れる。

ところが、宮廷の官僚主義にも妨げられ、マックス・エマヌエルの戦争もこのころになると不調になっていた。ヴェーニングは、当初計画していた850枚の版画を存命中に完成させることができなかった。ミハエル・ヴェーニングが1718年に死んだあと、息子のバルタザールが父親の仕事を引き継いだ。バルタザールもこの連作を完成させることができなかった。ようやく1721年、1723年、1726年に、残り3つの行政区であるブルクハウゼン、ランツフート、シュトラウビングの地誌的版画集が出版された。今日にいたるまで、『バイエルン公国の歴史的地誌的描写』は18

世紀初期の生活ぶりを、じつに魅力的に伝える源泉でありつづけている。この版画集成は、その後忘れ去られてしまった多数の城や修道院などの建物を描き出しているのである。

(鳥越輝昭訳)



図3 『カリング城 Castle Kalling』(Wikicommons)



図4 『アンデヒス“聖山”Der Heilige Berg Andechs』(Wikicommons) 修道院の建物が山に広がっているのが見える



研究調査報告

ホリのある暮らし —柳川（福岡県）の調査より—

安室 知
(非文字資料研究センター 研究員)

1. 有明海と柳川

有明海は長崎県・佐賀県・福岡県・熊本県に面する日本でも有数の内湾である。干満差が大きなことで知られ、最大では5メートルを超すとされる。また、有明海は全体に水深が浅く、平均では20メートルほどしかない。そこに、九州最大の川である筑後川をはじめ、鹿島川、嘉瀬川、矢部川、菊池川、白川、緑川など多くの河川が流入している。そして、そうした多くの河川がもたらす泥土が有明海全体を巨大な干潟にしている。そのため、古来から沿岸は埋め立てられて新田が造られてきた。

一方、内陸に目を向けると、海岸線に近い沖積地では、ホリと呼ぶクリークが多く残されている。こうしたホリは末が海と繋がっているため、干満の影響を受けることになり、その多くは汽水となっている。

柳河藩の城下町であり水郷で知られる柳川（福岡県）

の場合、街中を縦横に走るホリ（堀）は、住民にとっては街のシンボルとして、また柳川を訪れる観光客にとっては川下りの場として利用されている。しかし、ホリは、町場だけでなく、農村部においても重要な意味を持っていた。そうした様子を、以下では、柳川市の蒲池地区を中心にしてみる。

2. ホリからもたらされるもの

蒲池の場合、ホリの水は水田用水としてとくに重要であった。しかし、ホリはそれだけでなく、蒲池で暮らす上でさまざまな面で住民生活に関わりを持っていた。図1にあるように、水田地帯を縦横に走るホリには、慣行的に所有者が存在し、それはホリヌシ（堀主）といわれた。多くの場合、ホリは接する田に付属するとされた。ホリからは用水の他にも住民生活上とくに重要な二つのものがもたらされる。魚とゴミである。



図1 柳川市蒲池（国土地理院地形図より作製）

※黒い所がホリ

これらを採取する権利はホリヌシに限られていた。

水田に水が必要なくなる農閑期になると、ホリヌシを中心に仲間と誘い合ってはホリホシ（堀干）がおこなわれる。その場合、ホリホシの手伝いをするのをテマガタ（手間ガタ）といい、仲間同士お互いにテマガタをしあった。

ホリヌシは縦横一間、深さ3尺ほどの穴を掘ったりして、ホリの中にカマと呼ぶ魚の寄り場をあらかじめ作っておいた。ホリは単に漁場として利用されるだけでなく天然の養魚場でもあったわけである。

ホリにはコイ・フナ・ナマズ・ウナギなどの魚がいるが、とくに冬に捕った魚は串刺しにしてワラツボ（藁束）に刺し、クド（竈）の煙でいぶして保存することができた。どの家にも1・2本のワラツボが必ずあったという。この他、魚を捕るためにホリにはクモデ（四

ツ手網）やローゲ（簀）が仕掛けられていたし、入り江になっているところではハンギリ（桶）に乗ってヒシノミ（菱の実）を採ることもできた。

ゴミとは、現在でいう廃棄物の意味ではなく、ホリ底に泥状になって溜まった水草などの腐植沈殿物をさしている。これは柳川においては化学肥料が安価に手に入る以前、田畑の重要な肥料とされた。

ホリ底に溜まったゴミを揚げることをゴミアゲまたはドロアゲといった。秋から春先にかけてよくおこなわれたが、とくに田仕事本格化する前の3・4月にさかんにおこなわれた。ゴミアゲは10軒ほどが共同で、ゴミアゲ仲間などと呼ぶ組織を作っておこなった。ゴミアゲは、まず足踏み水車で水を掻き出してから、二人一組になって桶を操作しゴミを陸上に跳ね上げた。その後には、ベルトコンベア式のゴミアゲ機械も



写真1 ホリ



写真2 ホリの水を掻き出す足踏み水車



写真3 ホリの水を掻き出す桶



用いられるようになった。そうして汲み上げたゴミを田の一角に広げて天日で干してから田畑に入れる。

3. ホリの利用にみる農と漁の相関

つまり、同じホリ底の泥を除去する作業でも、肥料を得るためや用水路の保守のためにおこなう場合にはゴミアゲといい、ホリの魚を捕ることを主目的にするときはホリホシと呼んでいたことになる。結局のところ、ホリホシと言おうがまたゴミアゲと言おうが、実際には魚もゴミも採取している場合が多い。とくにゴミアゲの場合には必ずといってよいくらいに魚捕りが伴っている。その意味でいえば、ホリ底の泥を除去する作業は、魚が主産物で泥が副産物なのか、またその反対なのかといったことではなく、どちらの意味もあるととったほうがよい。

生活世界では、一つの生業技術が単一の意味しか持たないことはむしろ希であり、多義的であることのほ

うが一般的である。農と漁というまったく正反対の生業技術のようにみえても、実のところ生活を維持するという側面からすると、一つの技術がその両方に意味を持つ場面がよくある。とくに水（用水）を介して結びつく農と漁との関係においては、そうした傾向が高い。

ホリホシやゴミアゲは柳川の農村部においては、昭和20年代までおこなわれていた。その後は、農業に化学肥料が普及したことや、食物として淡水魚への嗜好が減少したことなどから、ホリホシやゴミアゲといったことはほとんどおこなわれなくなった。それにより、ホリは住民の生活世界から切り離された存在になってしまった。その結果、ホリへの関心は薄れ、ホリは何ら使われることないまま放置されることになる。現在、ホリには汚水やゴミ（廃棄物の意味）が溜まり、ホリは住民生活にとってはすっかり厄介者になってしまったといえよう。

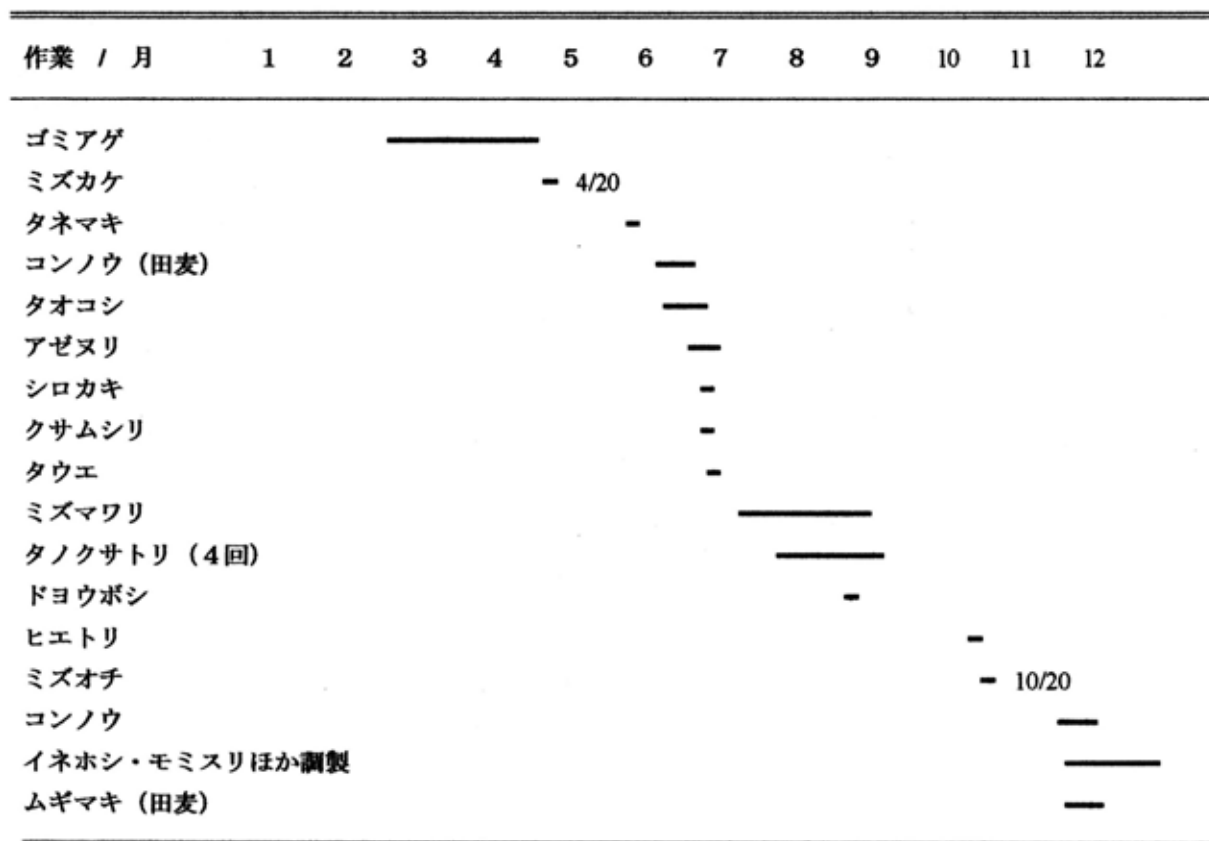


図2 柳川市蒲池の農耕暦



写真4 ホリに仕掛けられたクモデ



写真6 ホリの魚を突くヤス



写真7 ホリの水を汲む場所



写真5 柳川のカッパ



写真8 川下りの観光船



研究調査報告

戦時下日本の大衆メディア研究

台湾調査報告

鈴木 一史

(非文字資料研究センター 研究協力者)

松本 和樹

(非文字資料研究センター 研究協力者)

はじめに

戦時下日本の大衆メディア研究班では、センターが所蔵する紙芝居 241 点を軸に研究を進めながら、あわせて植民地も含めた各地での紙芝居の発掘や関連資料の収集に努めてきた。

2015 年 9 月 11 ～ 17 日に実施した台湾調査では、2 月におこなった台湾調査に引き続き、戦時下において紙芝居教育の拠点となっていた地域の現地調査と、紙芝居教育を受けた人物への聞き取りを中心におこなった（2 月の台湾調査については、No.34 の安田常雄「台湾・福岡調査報告」を参照されたい）。調査地は前回同様、紙芝居教育の拠点だった公学校を対象を絞り、台北と宜蘭の 2 地域を設定した。また、ひろく戦時下台湾の大衆メディアに関する情報を収集するため、台北の台北市立美術館、国立台湾図書館、南投の国史館台湾文献館で関連資料の調査をおこなった。

ここでは、宜蘭、台北両地域での聞き取りを中心に、植民地時代の台湾各地における紙芝居活動の様子について報告する（以下、台北調査については鈴木が、宜蘭調査については松本が担当した）。

◎台北市立美術館

9 月 11 日（金）夕方、台北市立美術館（以下、同館）を見学した。

1983 年に設立された同館は、20,000㎡の敷地を有し、近現代の台湾に関する美術品を 4,000 点以上収蔵している。1 階が企画展示室、2 階が常設展示室で、観覧時には、常設展示室内で収蔵品展「台湾製造・製造台湾」展が開かれていた。この展覧会は、日本統治下の台湾（1895 ～ 1947 年）を、台湾としての主体的な意識が形成された時代と捉え、絵画や工芸、書、写真などの収蔵品を「萌發」「伏流」「風采」「摩登」「築夢」「家郷」の 6 テーマに沿って紹介する内容だった。

筆者が特に印象的と感じ、研究班でも議論になった作品が、郭雪湖「南街殷賑」である。日本統治時代の台湾の様子を描いたこの作品の特徴は、多くの看板がひしめき合い、人々が行き交う、活気ある町の様子を描いているところにある。植民地の中でも日常の営みがあり、人々が生活していたことの意味を、この作品は問いかけているのではないだろうか。

後日見学を行った「学生運動」展と同様、様々な見解が存在する出来事を正面から取り上げる姿勢は、学芸員として見習うべきものと感じた。



写真 1 台北市立美術館

◎宜蘭県史館（李英茂さん聞き取り）

9 月 12 日（土）、宜蘭県史館にて、李英茂さんから宜蘭での紙芝居活動についてお話をうかがった。宜蘭を調査地にしたのは、事前調査で、同地の利澤國小（旧利澤簡公学校）で堀之内昇という教員が紙芝居教育をおこなっていたことが判明したからである（椰子見謙一「台湾航路」『教育紙芝居』1940 年 9 月号）。利澤國小と連絡をとることはできなかったが、宜蘭県史館を通じて、公学校時代に紙芝居を見たという李英茂さんを紹介していただいた。

李英茂さんは 1929 年、宜蘭の生まれである。

1934年に幼稚園に入園、2年間通った後、宜蘭公学校高等科に入学。1943年、台北州立宜蘭中学校に入学し、3年生のときに学徒召集を受けた。戦後、1952年ころから学校の先生を務め、童話や小説の翻訳もおこなっていた李さんは、現在宜蘭で歴史ガイドのボランティアをしている。

当日は、李さんが事前に言うことをメモしてくれていたの、まずその内容を語ってもらった。その後、私たちが質問するかたちで、紙芝居以外のことも含めて李さんに自由に語ってもらった。

メモによれば、李さんの知っている紙芝居は1940年頃の皇民化運動のあたりのものだという。紙芝居の木箱を自転車の荷台の上に載せて、公園で上演していた。そこで見た紙芝居には、子供の目を惹くような工夫「桃太郎」の桃が流れる、「猿蟹合戦」の蟹が這う）があった。ここで見た紙芝居は、当時の李さんにとってサーカスや指人形芝居（日本人の巡回劇団で、桃太郎や時代劇などをやっていたという）とともに、待ち遠しい楽しみの一つだった。

その後の聞き取りで、李さんが紙芝居を観たのは、台湾神社祭のときであることがわかった。場所は公園で、誰かはわからないが、教育部の人か、奉仕活動の女学生（日本人）が演じていた。観客は子供や学校の生徒で、だいたい20人から30人くらいだった。

李さんの話で面白いのが、公学校における紙芝居の活用だ。李さんの通っていた公学校では、高学年になると学校から紙芝居を借りることができた。放課後や土日などに、「桃太郎」や「浦島太郎」などの紙芝居を、低学年相手に演じていたようである。ただ、紙芝居の所在については、先生を通じて借りていたために、学校のどの場所に置かれていたのかはわからなかったという。

聞き取りの内容は多岐にわたったが、李さんの話のなかでもっとも鮮明な記憶をもって語られたのが学校時代の思い出。紙芝居と直接関連するわけではないが、紙芝居がおこなわれていた場を知る手がかりとして、学校や先生に関する証言は重要だと思われる。印象的なのが、学校が厳しくも楽しい場所だったという点だ。中学校時代の軍事教練の厳しさ、特攻隊基地となった南飛行場づくりの大変さを、李さんは特攻で亡くなった同級生の思い出をまじえながら語る。しかし、そうした厳しいこと、大変なことよりも楽しいことの

方が多かったと李さんは言う。例えば李さんが公学校4年生のときに教わった崎山先生は、「家なき子」や「母を訪ねて三千里」などの童話のほか、自作の童話（「はだしのキョウ（李さん注；籠のこと）」）も読み聞かせてくれたという。このときのことを李さんは楽しそうに語ってくれた。

李さんへの聞き取りからわかったことをまとめつつ、今後の調査の課題についてここで一度整理したい。まず、李さんへの聞き書きからわかったのが、宜蘭における紙芝居活動の動向である。宜蘭では、紙芝居が行事の際に指人形劇やサーカスとともに娯楽ものとして上演されていた。また、公学校では日本の童話や童謡が教育の場で活用され、その一環として紙芝居の貸出がおこなわれていた。興味深いのは、李さんの記憶では、これらの紙芝居がいずれも童話か、童話を題材にしたものであったが、国策紙芝居でなかったという点だ。ここで思い出されるのは、聞き書きの途中、李さんの口がしばしば重くなることがあったことである。国策紙芝居について見たことがありますかと私たちが尋ねたとき、李さんは口を閉ざし、見たことはないと答えた。一方で、国策紙芝居に描かれているような絵は見たことがあるという。ここからわかるのは、李さんのなかで、紙芝居と国策紙芝居とは明らかに違うものとして認識されていること、そして少なくとも、国策紙芝居について何らかの認識を持っていることである。その認識の裏には、長らく教員という職に就き、現在も歴史ガイドをしているという李さんの経験が見え隠れする。李さんの語りは、私たちは植民地時代における紙芝居の位置の複雑さを再認識させるものであった。

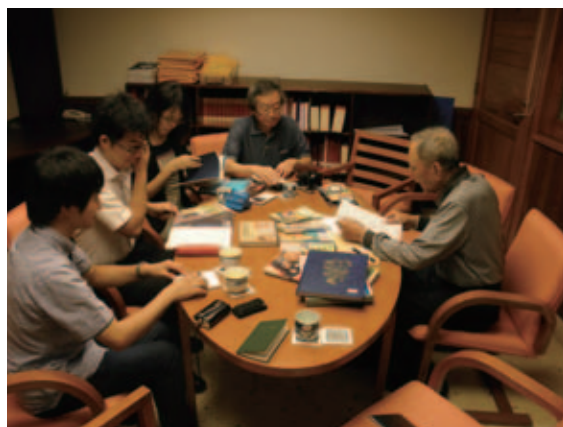


写真2 宜蘭県史館での聞き取りの様子

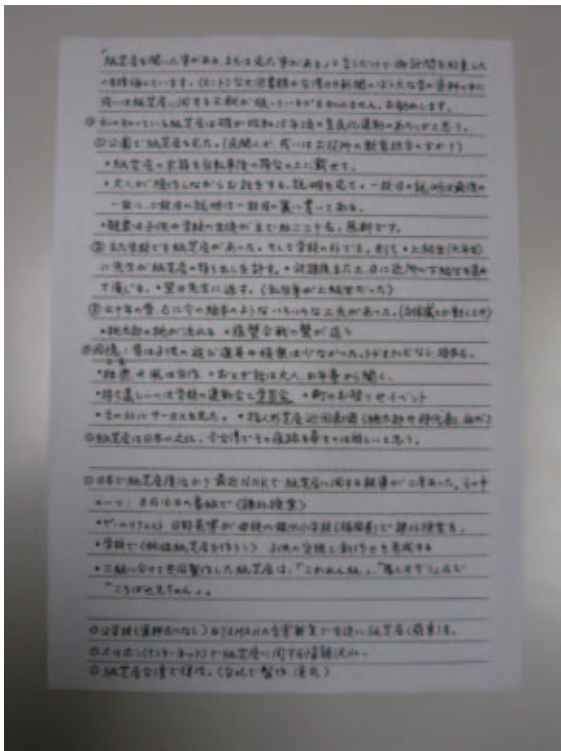


写真3 李英茂氏の手書きのメモ

◎台北市太平国民小学

9月13日(日)には、台北市太平国民小学(以下、同校)で調査を行った。

同校は1898年に設立された「大稻埕公学校」が起源である。同校周辺の土地はかつて「大稻埕」と呼ばれており、後に「太平町通」となったことで1922年に「太平公学校」に改称されたという(「歴史悠久好成績美哉我太平」 臺北市太平國小紅樓簡介 臺北市太平國小・臺北市太平國小校友會)。当日は、同校関係者の聞き取り及び所蔵資料の閲覧・撮影、校内見学を行った。本稿では、聞き取りの内容を紹介するとともに、共同研究を進める上で重要と思われる論点を提起したい。

聞き取りを行ったのは、蔡嘉元さん(1930年生まれ。同校40期生)、柯明正さん(1930年生まれ。1975～1979年に同校で教務主任)の2名である。

蔡さんは台北生まれである。父は映画館「永楽座」を経営していた。当時、台北には映画館が10館ほどあり、家の近辺には「永楽座」を含め「第一劇場」「太平閣」(終戦後は「新民劇場」。経営者が変わると劇場名も変わった)「第三世界館」と4館の映画館があったという。永楽座は6人用の席が並んでおり、上映作品は坂東妻三郎や嵐寛寿郎(鞍馬天狗)らが出演する日本映画が主だったが、「ロビンフッドの冒険」などの洋画も上映された。館主

の父はフィルムの配給も手掛けており、台中や嘉義の映画館に貸し出した「キング・コング」がヒットして返却が遅れ、車で母とともに回収に行ったこともあるという(蔡さんの名前にある「嘉」は嘉義からとられた)。当時は、台北市内をチンドン屋が1時間ほど練り歩き、電信柱に旗を立てて映画の宣伝を行っていた。

蔡さんによれば、戦前戦中期の台湾では二種類の紙芝居があったという。一つは、上演用の木枠がついた自転車を使うもので、無料で観覧できた。もう一つは、覗きからくりのように、1回1銭(当時は卵3個が10銭)で中を覗くものである。柯さんの話では、前者は毎日ではないものの、特定の曜日に来ることを皆が知っており、特に音を出さなくても上演時には人が集まったという。上演前と上演途中に飴を売っていたそうだ。

実演の様子や具体的な内容を柯さんに尋ねたところ、次のような答えが返ってきた。

無料で見られるため大人も集まっており、一回に12～13人程度が見ていた。場所は十字路の脇で、神社等では(荘厳な場所のため)紙芝居は上演されなかった。内容は爆弾三勇士をはじめ戦争ものばかりで(「チョコレートと兵隊」や「麦と兵隊」などを見た記憶があるという)、紙芝居の文字は日本語、実演の際は日本語と台湾語の「ちゃんぽん」だった。学校では日本語を話さなければビンタを受ける一方、街中で子供同士が話す時は台湾語を使っていたため、「ちゃんぽん」でも十分に通じた。学校の中で紙芝居が上演された記憶はない。寺の境内で上演されているとすれば田舎だったのではない。現在80歳以上の人間にとって、子供らしく過ごせた時間は4～5年間位だった。小学3年生以降はほとんど戦争で、1938～1939年頃になると紙芝居どころではなくなった。

今回の聞き取りは、戦時下台湾における紙芝居の実態を知ることが主眼だった。しかし、聞き取りの中で、両氏は紙芝居よりも人気を博していた娯楽として人形芝居を挙げ、当時の実態を語られた。

人形芝居は、大人・子供を問わず台湾での大きな娯楽の一つである。病気の快癒などを寺に祈願し、そのお礼として上演を依頼したもので、地域の住民に見せるという意味合いもあった。上演場所は、台北の場合は寺や廟、お祭りの場などで、桓武や三国志などの歴史物、史艶文という架空のヒーローものやオリジナルストーリーが上演されていた。紙芝居のように飴を売るわけではなく、

無料で見られたこともあって、大人も子供も上演スケジュールを把握していた。また、駄菓子屋で売られていたくじの景品にも、人形芝居に使う簡素なつくりの人形があった。紙芝居は動きがなくストーリーも単調で、堅苦しく宣伝的な内容だったため、人形芝居の方が面白かった。手を動かすだけではなく、人形の動作や声を聞いて、人が操っているようには見えないと感じた。

1941年以降はほとんど見なくなったが、日中戦争の頃からアジア・太平洋戦争の時期に統制が厳しくなったと感じた。その頃は、上演の言葉の中に反体制或いは反戦的な要素がないか否かを、私服の刑事が見張っていたことを覚えている。大陸や（三国志などの題材でも）戦争の目的には触れないようになったことから、子供でも統制の厳しさを感じていた。

聞き取りは午前中の二時間を使って行われ、昼食を挟んで午後からは資料閲覧と撮影を行った。



写真4 台北市太平国民学校第二回修了記念写真帖
台北市・太平国民小学校蔵

以下では、聞き取りの内容を踏まえ、今後の共同研究において重要と思われる論点を挙げる。

一点目は、紙芝居と人形芝居との比較である。柯さんは聞き取りの中で、人形芝居と比べて紙芝居が霞んで見えたという発言をされた。当時の台湾の娯楽において、紙芝居がどのような位置にあったかは、今後の研究が望まれる。

二点目は、台北と他都市との比較である。聞き取りの際、柯さんは寺の境内での紙芝居実演を見たことはなく、田舎で行われていたのではないかと語られた。兩人ともに台北育ちであることを考えるならば、他地域での紙芝居の実態との比較が必要だろう。

三点目は、時代の中で変化する大衆文化といかに向き合うかという問題である。蔡さんと柯さんの育った環境

は対照的である。聞き取りを行った研究班の安田氏が「モダンボーイ」と評したとおり、蔡さんは映画館を経営する父のもと、映画をはじめ当時の大衆文化を豊富に摂取できる環境に身を置いていた。対して柯さんは、小学4～5年の時、航空機に使うひまし油を作るために空き地に畝を作り、300～400m程離れた屠殺場から牛馬の糞を運んでいたという。蔡さんが柯さんの話を聞きながら「稲を見たこともない」と述べたことは、二人が育った環境の違いを象徴的に表している。

より多くの映画に接していた蔡さんこそが、統制が進む中で大衆文化のありようを正確に捉えられる感性を培うことができただろう。しかし、蔡さんは自らが受けた教育を懐かしそうに語り、礼節が失われたと現在の社会を憂いていた。対して柯さんは、人形芝居の変化について「絶対に大陸のことには触れない」「戦争に関する問題をとっても注意して触れない」と語られた。そして、筆者の「後からではなく、子供の頃に人形芝居のあり方が変わったと感じたか」という問いかけに、「やっぱり、段々と少し変わったなあ」と答えていた。大衆文化の変化を感じ取り、それを自らの言葉で捉えていたのは、「モダンボーイ」ではなく、航空機のひまし油を作るための労働を強いられた少年の方だった。ここからは、「モダン」であることと、時代の変化を日常から感じ取ることの間にある隔たりという問題が読み取れる。国策紙芝居、ひいては戦争と大衆文化との関わりを考える上で、この問題は避けて通れないのではないだろうか。

今回の聞き取りは、台北での紙芝居の実態や当時の子供の暮らしぶり、そして紙芝居よりも影響力を持った人形芝居の実態を知ることができた点で、有意義な調査だった。



写真5 台北市太平国民小学にて



和船とともに歩んだ 30 年

昆 政明（非文字資料研究センター 研究員）

神大に赴任して3年目になりますが、最初の一年間は1号館7階に研究室がありました。そこからは、横浜港とベイブリッジが一望でき、入出港するクルーズ客船を見ることができました。それは、私にとって夢のような場所でした。小学校6年生の修学旅行で青森函館間の青函連絡船に乗船して以来、私は船の熱烈なファンとなっていたのです。

神大にお世話になる前の40年間は、郷里の青森県立郷土館という県立博物館に勤務していました。郷土館時代に調査研究として「伝統的生産技術の調査研究」を担当し、テーマのひとつとして「青森県の漁労用和船」を取り上げました。この調査は1981年度から3カ年計画で実施し、1984年度に報告書を刊行して終了、特別展も開催しました。青森県は津軽海峡を介して北海道に向き合い、太平洋、日本海、大きな内湾として陸奥湾を抱えています。位置的にも地理的にも多種多様な漁業が行われ、それに使用する漁船もバラエティーに富んでいました。また、幸いなことに木造船が強化プラスチック船に取って代わられる直前の段階で、現役の船大工さんも多く、地域によっては丸木船がまだ使われているといった、非常に恵まれた調査環境にありました。

しかし、船大工道具などの収集は行うことができませんでしたが、船の実物を収集することは現実の問題として不可能なことでした。その後も、船絵馬の特別展を担当するなど、和船には興味を持ち続け、研究者仲間と「全国和船研究会」を立ち上げ、各地の研究者持ち回りで年1回の研究会を開催しました。横浜市でも2回開催しています。

1995年のことです。地元地方銀行の「みちのく銀行」から、合併20周年記念事業のひとつとして伝統的木造漁船の収集と展示を行いたい、との相談を受けました。先に刊行した報告書がこの話を呼び込んだのです。当時のみちのく銀行（頭取 大道寺小三郎氏）は、さまざまなメセナ活動を行っていました。その一環として「漁船博物館」の建設を企画していたのです。職場の上司の許可もあり、郷土館の仕事とは別に北東北、北海道の津軽

海峡沿岸の木造漁船収集に協力することができました。郷土館の調査からほぼ10年が経過していましたが、調査ノートを頼りに海岸部を回ると、驚いたことに報告書に写真掲載した漁船がそのまま残っている例も少なくありませんでした。銀行の各支店の方々も収集に協力してくださり、函館周辺では道南海事という海洋土木会社と木造船研究に造詣の深い山田氏の協力もあって、2年を待たずに100隻を超える木造漁船を収集することができました。これらを収蔵展示する博物館の建設に平行して、写真撮影、実測図作成、台帳整理を行い、地域の特徴を持った「ムダマハギ型漁船」67隻を選択して、重要有形民俗文化財に指定されたのは1997年のことでした。

博物館は1999年に「みちのく北方漁船博物館」としてオープンしました。開館後は、主に日本財団の助成を受けた、ムダマハギ型漁船の復元建造や艀櫓、帆走の記録などの作成や企画展の開催に協力し、そのときの経験がすべて現在に生かされています。

2002年10月頃だったと思います。大道寺氏から突然電話があり、大船渡市の新沼留之進氏（気仙船匠会会長で復元大型和船建造の第一人者）を紹介して欲しいとの依頼がありました。直接面識が無かったので友人から情報を得て伝えました。後のみちのく丸、実物大復元弁



写真1 みちのく北方漁船博物館展示室

才船の建造の始まりでした。2004年に起工、翌年11月に進水式（ダイオロシ）を行いました。実物大復元としては岩手県大船渡の気仙丸、佐渡の白山丸、大阪の浪華丸に続く建造です。全長32m、全幅8.5m、浪華丸と並ぶ千石船級の復元船となります。しかし、残念なことに大道寺氏は完成を待たず逝去されました。完成後のみちのく丸は漁船博物館脇の岸壁に係留された状態で、その利用については何も決まっていませんでした。

あるシンポジウムで行った報告の後、地元の若手経済人2名が私を訪ねてきました。みちのく丸の帆走に協力して欲しいとの依頼でした。さまざまな問題はありませんでしたがそれらの問題を粘り強くクリアし、みちのく丸は2006年6月、陸奥湾内で自力帆走を行い、10月の3回目の帆走では風上に向かって帆走する「マギリ」走りも成功させました。これらの事業は当初、全くのボランティアで行われたものでした。その後年に数回の帆走を行い、できるだけ昔の方法で操船できるよう試行錯誤を重ねました。そのときに参考となったのが、船絵馬や古写真、漁船の帆走に関する聞き書きなどでした。

2011年には北前船のルートをとどる「北前船 日本海文化交流事業」が各地元新聞社、地方銀行が主体となって企画され、全行程を陸上からのサポートでしたがこれに同行、各港の一般公開では案内役を担当しました。神大に移った2013年には太平洋沿岸の港を回り、最終目的地には東京港が選ばれました。期間が夏休み中だったこともあり、前回同様、全行程に同行することができました。これらの経験はすべて現在の私の身となっており、漁船研究から船舶研究全般に広がるきっかけともなりました。

残念なことに、みちのく北方漁船博物館は2014年をもって廃館となりました。指定文化財と博物館は青森市

に譲渡され、現在は市の歴史館として再発足しています。また、みちのく丸は野辺地町の所有となり、今後の活用を検討中だと聞いています。思い出深い博物館は姿を消しましたが、神大において新3号館の1階に展示スペースが設けられ、その一角に企画展「近藤友一郎と船模型の世界」を開設することができました。まだまだ船の展示とは縁を切ることができないようです。

自身の研究としては、国際常民文化研究機構で昨年度から3カ年計画で「東アジアの伝統的木造船建造および操船技術の比較研究」チームの一員として、研究エリアを海外にも広げるよう努力しています。また、新しくメンバーに入れていただいた非文字資料研究センターの「船上生活者の実態とその変容に関する研究班^{はしけ}」では、これまで研究テーマとしては考えたことも無かった舳^{はしけ}について調査することになりそうです。舳については羽田空港へのリムジンバスの中から港の船溜に係留されている姿を見下ろしており、いつも気にかかる存在ではありました。これからどのような展開を見せるのか、楽しみなテーマだと思っています。

【参考文献】

青森県立郷土館編 『青森県の漁撈用和船』 青森県立郷土館 1985

みちのく北方漁船博物館 『ムダマハギで海に出よう—和船の操船技術—』 みちのく北方漁船博物館 2004
昆政明 「北前型弁才船みちのく丸の日本海就航」『北前船「みちのく丸」日本海を往く』 東奥日報社 2011

みちのく北方漁船博物館編 『よみがえった北前船の道みちのく丸日本海周航の記録』 みちのく北方漁船博物館 2012



写真2 マギリで風上に向け航行するみちのく丸



写真3 みちのく丸船上での解説



サントペテルブルクにて

駒走 昭二（非文字資料研究センター 研究員）

この秋、初めてサントペテルブルクを訪ねた。長年の望みが叶った訪問である。日本からヘルシンキ経由で14時間。隣国とは思えぬ長旅に領土の広さをつくづく思い知らされる。ロシア第2の都市であるこの街の歴史は比較的浅く、建都まだ300年ほどしか経っていない。しかし、かつて帝政ロシアの首都として繁栄しただけのことはあり、建築物の一角が豪壮とし、街全体が堂々たる威厳に包まれている。さすが久米邦武が『米欧回覧実記』の中で「建築ノ壮大ナルコト、欧陸ニテ第一ナルヘシ」と評しただけのことはある。西洋の歴史的な街の多くがそうであるように市街地には現代的な高層建築物はなく、低層の建物が整然と、そして広狭の減り張りをもって連なっている。そのためか日本の都市に比べて空がすっきりと広く感じられる。北のヴェネツィアとの呼び名もあるそうだが、大きく蛇行するネヴァ川を中心に多くの運河が街を巡っているさまは、ゴンドラこそ見かけないものの、確かに水の都ヴェネツィアを彷彿させる。また、街の主要道であるネフスキー大通りは、シャンゼリゼ通りに喩えられることもあるという。街の中心にそびえる旧海軍省の建物から街を一直線に貫くその大動脈は、沿道の洒落たオープンカフェや豪華なホテルの建物なども手伝って、なるほどパリの目抜き通りに似ていないこともない。ピョートル大帝が18世紀初頭に国の近代化を目指して建設した街は、ロシアという国が一方で日本との間に領土問題を抱えつつも、一方では間違いなく西洋にも位置する、まさにユーラシアの国であることをあらためて実感させるのである。

さて、今回の訪問者は私を含めて日本語学研究者3名。その目的は、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク支部にて、日本からの漂流民たちが残した資料とそれに関するアカデミーの記録を調査することであった。周知の通り、ロシアへはかつて多くの日本人が漂着している。伊勢白子の大黒屋光太夫が帰国後、多くの情報を日本にもたらしたことは有名であるが、彼以外にも多くの日本人水手がロシアへ流れ着き、そこで

暮らし、帰国することなく一生を終えている。中でも私が最も関心を寄せているのが薩摩からの漂流民ゴンザとソウザである。

ゴンザとソウザは、1728年11月、若潮丸という船で他の15名の乗組員とともに薩摩から大坂へ向かった。薩摩藩の関係者に米、紙、布などを届けるためであった。しかし、船は途中で嵐に遭遇。半年以上漂流した後、翌年6月、カムチャツカの海岸に漂着した。一命をとりとめて安心したのもつかの間、一行はその地に巡回してきたコサックたちの襲撃を受け、17名中15名が惨殺されてしまう。その中にはゴンザの父親も含まれている。生き残った11歳のゴンザと36歳のソウザも彼らの奴隷として酷使されることになった。その半年後、派遣されて来た上級役人によって2人は幸い救助、保護されるのであるが、もちろん帰国できる術はなく、むしろ日本とは逆方向の西へ西へと大陸を移動させられることになる。ヤクーツク、トボリスク、モスクワ、そして1733年に遂に首都サントペテルブルクに到達する。女帝アンナ・ヨアノヴナは彼らと面会した後、彼らへの扶養と同時にロシア正教の洗礼、そしてロシア語の学習を命ずる。さらに1736年になると、科学アカデミーにてロシア語を学ぶだけでなく、自分たちの言葉を忘れないためにロシアの少年たちに日本語を教えるよう勅命を下す。その後、2人は科学アカデミー内に開設された日本語学校で給与をもらいながらロシア人子弟に日本語を教えていたが、やはりそれまでの過酷な暮らし、慣れない環境が災いしたのであろう。ソウザは1736年9月に43歳で、ゴンザは1739年12月に21歳で亡くなっている。

ところで、ゴンザはソウザの死後、科学アカデミーの司書補であり彼らの監督者でもあったアンドレイ・ボグダーノフと協力して日本語の参考書を6点作成している。『露日単語集』『日本語会話入門』『新スラヴ日本語辞典』『簡略日本文法』『友好会話手本集』『世界図絵』である。これらはすべてボグダーノフが用意したロシア

語をゴンザが日本語に訳し、キリル文字で記すという形式をとっている。露日辞典など存在しない 18 世紀のことであり、いずれもたいへん貴重な資料である。しかもゴンザは少年水手であり、また一般の民は全国共通語の意識など持たない時代の薩摩人であるため、そこに記載されている日本語は純粋な薩隅方言である。日本国内の過去の文献のほとんどは、中央語にもとづく書き言葉が漢字仮名交じりで記されているため、方言まで含めた日本語史を再構築するのに適さない。その点、本資料は方言がキリル文字という音素文字で記されているため、その生きた話し言葉をより精密に再現することが可能である。また当時の中央語と地方語との相違、そこから推察される言葉の伝播の様子、現代方言との相違から推察される方言内の変容の仕組み等、本資料から得られる情報とそこから展開しうる学問的興味は計り知れない。日本語学にとって一級の資料と言ってよいだろう。

今回の訪問で、本資料の原本を調査することができた。これまでは日本に伝わっているマイクロフィルムでしか閲覧することができなかったが、原本調査によって不鮮明な箇所の確認や、実物の装丁、サイズ、紙質等を知ることができた。残念ながら、その存在が期待された『世

界図絵』の清書本は発見することができず、その紛失を確信せざるを得ない結果となったが、その一方でこれまで日本に伝えられていなかった草稿本(『露日単語集』『日本語会話入門』)の存在が確認でき、さらにそれらのマイクロフィルムも後日、作成し譲渡してもらえることになった。そして最大の収穫だったのが、我々日本の研究者と科学アカデミーとの間で共同研究を立ち上げる約束が結ばれたことである。門前払いも覚悟していた我々にとって期待以上の成果であった。その他、報告すべきことは多々あるが、別の機会に譲る。

科学アカデミーでの調査は、外務省の方をはじめ多くの人々が仲介してくださり、ようやく実現したものである。実際の調査でも所長はじめ多くの研究員が友好的に協力してくださった。つくづく多くの人に支えられて研究が行えているのだと実感する。

科学アカデミーの図書室の窓からは目の前を流れるネヴァ川がよく見える。ソウザの死後、一人残されたゴンザは日々この大河を眺めながら、己に課せられた仕事に打ち込んだのではなかろうか。図書室の窓辺で彼が作り上げた書物を手に取り、頁を繰り、筆跡を指でなぞりながら、彼の無念と熱意に思いを馳せた。故郷から遠く離れたこの異国の地で、建設が始まったばかりのこの西洋の街でたった一人、彼は何を想っていただろう。280 年後に訪れた同郷の者として身の引き締まる思いであった。



写真 1 現在の科学アカデミー東洋学研究所。19 世紀に皇帝ニコライ 1 世が子息のために造った宮殿の一部である。



写真 2 ネヴァ川を挟んで科学アカデミーの対岸に見えるペトロパヴロフスク要塞。サンクトペテルブルクの歴史はこの建設から始まった。中央の聖堂は 1733 年建造。奇しくもゴンザたちが到着した年に完成したものである。



戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語

—「用語編」その3

原田 広（非文字資料研究センター 研究協力者）

はじめに

『ニューズレター』No.33、No.34に引き続き、本センター所蔵戦意高揚紙芝居から採録した脚本データの紹介とともに、本コレクションの戦時下の特性の解明作業を試みる。今号「用語編その3」は、当初、脚本データの分類順に〔国内社会：13／宗教・民俗〕〔同：14／国史〕〔同：15／国体明徴・日本精神〕を対象とする予定であったが、この3項目（一特に分類15）が国策紙芝居分析における恐らくは核心的な課題となるであろうことが予見されるため、〔国内社会：16／政治・外交〕から先に取り上げることとした。

本稿が主に対象とする平沼・阿部・米内の短期三代内閣を間に挟む近衛内閣時代（1937年6月から1941年10月の約4年余）のキーワードは、国内外の政治的・経済的閉塞を打破するための「新体制」であった。この数年間はまた、国策紙芝居の印刷・刊行が本格化する時期でもあり、紙芝居脚本の紹介に入る前に、当時の時代背景と主要な政策事項を、本稿に関連する限りにおいて見ておきたい。

① 新秩序

当時の国際情勢に対する我が国政府・軍部の大局的認識は、第一次大戦後の資本主義的世界秩序（ヴェルサイユ・ワシントン体制）から、強国を中心とする国家群への移行期にあるというものであった。すなわち世界史の現段階を、19世紀以来の植民地主義に拠る現状維持的な「米英圏」、独伊の民族主義・全体主義原理を掲げる「欧州新秩序」、五カ年計画に基づき国防国家を建設しつつあるソ連の「共産主義統制経済」、そして日本を中心とする「東亜新秩序」という四大ブロックの拮抗関係にあると定義し、その中にあって、新興三ブロック（日独伊三国同盟、独ソ不可侵条約、日ソ中立条約）によって米英を封じ込め、植民地支配からアジアを解放する日本の歴史的役割を位置づけようとする（伊藤隆『近衛新体制』中公新書、1983.11.15、p217-218）。そして、この時代認識を端的に示すものが、「帝国の冀求する所は、東亜永遠の安定を確保すべき新秩序の建設に在り。この新秩序の建設は日満支三国相携へ・・・、東亜に於ける国際正義の確立、共同防共の達成、新文化の創造、経済結合の実現を期するにあり。是れ実に東亜を安定し、世界の進運に寄与する所以なり」と、日本政府の見解を内外に公式表明した第二次近衛声明（1938年11月3日「東亜新秩序建設に関する声明」）であった。

政府・軍部さらに言論界において、こうした歴史観・世界観が共有された根底には、「（西洋近代思想の帰するところの）個人主義は、個人と個人、階級間の対立・・・、国家生活・社会生活の中に幾多の問題と動揺とを醸成せしめ、今や西洋に於ても、所謂市民的個人主義に対する階級的個人主義たる社会主義・共産主義・・・、国家主義・民族主義たる最近の所謂ファッショ・ナチス等の思想・運動」を生起させているとの捉え方（文部省編『国体の本義』1937.5）が存在した。近衛内閣が掲げた東亜新秩序構想は、近衛ブレーン「昭和研究会」に参集した知識人集団（嵯峨正道「東亜共同体の理論」、三木清「共同主義の哲学」など）によって、皇道主義から一線を画した理論化（支那事変の世界史的意義の位置づけ、日本型統制経済による自由主義・共産主義の克服）が行われ、西田幾多郎「日本文化の問題」「世界新秩序の原理」を媒介とした「近代の超克」論とともに、時務論を超えた思想的論点を形成する。

② 総動員

第一次近衛内閣発足のほぼ一月後に勃発した盧溝橋事件（1937年7月7日）に対して、政府は初期の不拡大方針を放棄、北支事変の呼称を廃して支那事変と呼び、戦火の拡大・長期化が不可避となるに伴い、高度国防国家（総動員体制）の構築を目指して、「国民精神総動員実施要綱」を閣議決定（1937年8月24日）し、さらに「国家総動員法」を布告（1938年4月1日）する。

国民精神総動員運動は（その「実施要綱」に見るように）、事変勃発という時局に関する「宣伝、国民教化方策」の一大国民運動であり、「挙国一致、尽忠報国、堅忍持久」の基本精神で、「思想戦、宣伝戦、経済戦、国力戦」を実施するために、主務庁たる「情報委員会、内務省及文部省」および「民間有力団体」「道府県」「市町村」を実施機関として、「諸会社、銀行、工場、商店等の責任者の実施計画」「各種言語機関の積極的協力」「ラヂオの利用」「文芸、音楽、演芸、映画等関係者の協力」を求めるとともに、特に「国民生活の現実への浸透」「従来から徹底を欠く憾のある都市知識階級への留意」「社会指導的地位の在る者の率先躬行」を実施上の注意として求めるというものであった。

また国家総動員法は、日中戦争の激化・拡大（武漢三鎮への動員・巨額の出費）に伴う経済の戦時体制化を目的として、戦争（一事変も含むとされる）に際して「国防目的の達成のため国の全力を最も有効に發揮」できる

よう、人的・物的資源を統制し運用することを定めた戦時立法である。その統制・運用の範囲は、労働問題、物資統制、金融・資本統制、カルテル、価格一般、言論出版と、国家総動員上に必要な全領域を包括したものであり、これによって、政府は議会の承認なしに経済と国民生活の全体にわたって統制する権限を得た。

本二案による国民全体の再組織化には、昭和前期を通じて、一前者については1923（大正12年）11月10日の「国民精神作興に関する詔書」を契機とした国民教化運動が、後者については1927年5月の田中内閣における総動員準備調査機関「資源局」（後に「企画院」に統合）の設置があり、国民教化運動（国体観念の明徴、国民精神の作興）と総動員運動（統制経済、経済生活の改善、国力の培養）が、公益本位のイデオロギーを軸に結合され、地域・産業組合などを基盤として国民各層を組織化するという前史が“実績”として残されていた。支那事変の勃発に伴う本二案の速やかな決定には、これらを推進してきた革新官僚組織の存在が深く関わっているであろうし、運動のラディクスとして両端を形成していた軍部皇道派（天皇帰一体制の追求）と統制派（総力戦体制の構築）の主張と影響も無視できない。

これ以降、外に向かつては、日中戦争を“東亜の安定を確保すべき新秩序建設のための正義の解放戦争”であるとする「聖戦」思想と、国内においては、“国体の本義に基づき資本主義制度を改革するための国家革新”が必要であるとする「新体制」運動の総合化（強力な中央組織の構築）が迫られていく。国民精神総動員の運動組織は、1940年4月の改組（中央連盟と委員会を総動員本部に一元化）を経て、大政翼賛会の発足に伴い1940年9月23日に解散する。国家総動員法は、1945年の敗戦によって名目を失うまで存続する。

③ 新体制

各方面の衆望を担って1940年7月22日に発足した第二次近衛内閣は、「支那事変の解決、そのための外交処理、両者に関連する国内問題—新体制運動による軍部抑制」を課題として登場したとされる（赤木須留喜『近衛新体制と大政翼賛会』岩波書店1984.1.13、p138）。しかし、内閣発足2カ月の間に、9月23日北部仏印に進駐、9月27日日独伊三国同盟を締結することによって米英との対立を決定的なものとしていく。また、7月26日の閣議決定「基本国策要綱」に掲げた国民組織の確立・議会の改革を含む〈新政治体制〉の構築問題は、その準備会を構成した諸勢力の呉越同舟の議論を経て、10月12日に大政翼賛会として発足する（一後に政治性のない公事結社として位置づけられる）ことになる。

近衛新党・新体制問題の助言者であった東大教授・矢部貞治は、この新体制準備会を巡る諸勢力について「三国同盟の熱心な主張者でナチス流の一国一党を唱える革新右翼、ナチス的一党独裁は国体に反するとして皇道翼賛の精神運動を唱える観念右翼、翼賛会を単なる行政

の補助機関たらしめようとする内務官僚、統制経済が営利主義を拘束することを忌避する財界、バスに乗り遅れるなど翼賛会になだれこみながら議会局に押し込まれて不満だった政党勢力」があったことを指摘したうえで、近衛がつくった翼賛会は「陸軍や革新右翼の企てていた独裁をこれによって挫折せしめた」と「その重大な消極的功績」を評価する（『近衛文麿：誇り高き名門宰相の悲劇』光文社NF文庫、1993.10.7、p142-144）。しかし、帝国憲法の改正ないし弾力的運用を含む全政治・経済・社会体制の変革を目指す「一種の無血革命ともなるはずもの」（伊藤隆『前掲書』p214）であった新体制運動が、大政翼賛会の発足に帰結したことは、明治憲法の根幹をなす天皇の統帥権・万民輔弼の本義の論理を、如何なる勢力も超越できなかった「その時代の解釈システム」（有馬学『帝国の昭和』講談社学術文庫、2010.5.22、p265）の蹉跌・収束を意味した。また、「当時の国民感情には軍部の横暴、独走に対する反感、批判はあったが・・・、むしろ国民の大部分はドイツに伍して英仏と対抗し、大東亜新秩序を建設するため、新体制運動に協力するよう要請され、事実そうになっていた」（大杉一雄『日米開戦への道（上）』講談社学術文庫、2008.11.10、p261）と指摘されるような大勢も間違いなく存在したのである。

大政翼賛会発足過程の1940年9月11日には内務省の部落会・町内会等整備要綱通達により、町内会・部落会・隣保班（隣組）が大政翼賛会の基礎単位として組織化され、また各種団体報国会、翼賛壮年団などの既成組織を傘下に収め、ファッショ的国民組織を完成させていく。10月から翌年5月にかけては、国家総動員法を根拠とする各種統制令の再編成、勤労新体制確立要綱、経済新体制確立要綱、人口政策確立要綱、科学技術新体制確立要綱、大日本産業報国会の結成など、各分野の統制政策が次々と立案・実施される。総力戦体制を推進するために高度の政治性をもつ中央組織の構築を目指した「新体制」運動は、最終的には内務行政の補助組織（「精神総動員運動」の焼き直し—矢部『前掲書』p143）となったが、大政翼賛会は、大日本翼賛壮年団・大日本婦人会などとともに国民義勇隊に統合・改組される1945年6月まで存続し、戦時体制を支える重要な役割を果たした。

紙芝居の脚本から、このような前史の存在（あるいは歴史的文脈）を直截的・具体的に読み取ることは、同時代の所与として作品に織り込まれていることもあって、ある種の困難が伴うであろう。しかし、1937年夏から始まる国民の戦意高揚を目的とする官製の国民精神総動員運動（ままた「精動」と略される）、経済活動・社会生活・言論活動と国内社会全般にわたる国家総動員法の施行が、本稿が扱うところの戦時下社会の起点をなしていること、そして、1940年秋に発足した大政翼賛会のもとの国民再組織化が（「精動」の模様替え、官制



化と言われながら)、より濃密な戦時体制への精神的・人的動員を可能にしたのである。

16／国内社会：政治・外交

上に述べた近衛時代を含む昭和戦前期には、第一次若槻内閣の後を受けて発足した田中儀一内閣以降、終戦処理に当たった鈴木貫太郎内閣まで、約20年間に17代の内閣が交代する。世界的な金融恐慌・第一次大戦後の軍縮問題・全体主義国家の出現などを背景とする当時の国際関係への隊伍、国内の一大勢力であった陸海軍と政治とのダイナミズムのなかで、国内の政治舞台は常に鋭い緊張に晒されていた。既に紹介した「国際関係」や未紹介の「国内社会：22／標語」との内容的なオーバーラップを孕むところであるが、ここには、当時の「国内社会：16／政治・外交」として括り得る下記23件の用語を採録した。

国難、国家非常（国の危急、国の一大事）12、新体制（秩序、時代）5、総力戦4、高度国防国家3、戦時体制（戦時下）3、総選挙3、総動員3、大政翼賛3、東条英機3、御前会議2、国土防衛2、外交三原則1、興亜奉公日1、近衛首相1、国威1、国策1、大詔奉戴日（8月8日）1、大政翼賛会1、日ソ中立条約1、翼賛1、翼賛議会1、翼賛選挙1、立憲政治1

これらの政治・外交の関連用語は、当然のことながらこの時期の全てを覆うものではなく、むしろ、ジャーナリスティックな時流に乗りやすい表層的用語がキーワード的に使用されている。しかし、そのことが逆に、国策紙芝居の大衆メディアとしての自意識を際立たせることとなっていると考えられるし、紙芝居作品に表れる時代認識とはそのような公式用語を駆使する作品の集合意識として読み取れるものであろう。以下、関連用語を集約しながら、年次のはっきりしている採録用語から順に、脚本における使用例を見ていきたい。なお、前号までと同様、文中に「カギカッコ」で引用する脚本はイタリック体・現代仮名遣いに改め、脚本内の採録用語は太字とし、出現回数の引用符〈3回以上〉〈3回未満〉を省略した。

① 〈高度国防国家〉〈総力戦〉〈戦時体制〉《国土防衛》：

〈高度国防国家〉の理念は、1934年10月1日に陸軍省新聞班が公刊した『国防の本義と其強化の提唱』（通称「陸軍パンフレット」）に描かれている。「たたかいは創造の父、文化の母」と戦争賛美的な一言で始まる本パンフの主眼は、総力戦を戦うための国家システムの構築であり、総力戦の不可避性と備えるべき諸条件をB6判・全56頁で展開し、「冀はくは、全国民が国防の何物たるかを了解し、新なる国防本位の各種機構を創造運営し、美事に危局を克服し、日本精神の高調拡充と世界恒久平和の確立とに向つて邁進せんことを」と閉じられる。〈高度国防国家〉の構築の必要性は、次のような箇所に端的

に述べられているだろう。—「戦争とし謂へば直ちに武力戦を想起する。勿論武力戦は戦争の骨幹である。然し乍ら、既に述べた通り近代戦争は、武力単独戦を以て終始し得る如き単純なるものではなく、敵国を徹底的に圧伏粉碎せむが為めには、之が全生活力を中断するを要する。是に於てか戦争手段としての経済戦、政略戦、思想戦は武力戦に匹敵すべき重大なる役割を演ずべきである」と。

紙芝居作品への登場例は次のようである。—「大きな使命を今我々日本人は背負っている。ひとつ、力一杯の**国防国家**をうちたてること。ひとつ大東亜を一本にまとめ導いて正しい平和な新しい大東亜にしたてあげること」（『大政翼賛』1940.12）。日米開戦一年前の作品であり、日中戦争局面打開のための国防国家建設と大東亜共栄圏が等値されていることが特徴である。「（八公）俺だって知ってるぞ、滅私奉公、臣道実践、すべてが**高度国防国家体制**の建設にまっしぐらよ。（熊公）てめえ急に物識りになったな」（『滅私奉公：娯楽用』1941.06）。「（常会の大きな務めは上意下達）国策がこうして徹底させられることが**高度国防国家**にとってはぜひとも必要なのですし、国民の一人一人もまごつかずに忠義が尽くせるのです」（『常會の手引』1941.08）。硬質の四文字ないし六文字熟語が、落語ネタの地口的・庶民的言語と同居させられ、あるいは「上意下達」の実践組織となるべき隣組の会長が常会の枕コトバ的に使用するという一種の異質（和）感によって、観るもの・聴くものへの記憶定着を強化する効果が現われている箇所であろう。



図1 滅私奉公

『国防の本義』の好戦的・軍国主義的傾向に対する貴族院議員・憲法学者美濃部達吉の批判論文「陸軍省発表の国防論を読む」（『中央公論』1934年11月号）は、軍部・在郷軍人会・政友会の攻撃による著書の発禁、議員辞職（天皇機関説事件1935年2月）を惹起し、さらに岡田内閣は二次にわたる国体明徴声明（同8月3日、10月15日）において天皇機関説の排撃を公式に表明

する。陸軍パンフの社会的影響について「この内容を見ると、以後、日中戦争、太平洋戦争へと軍部の完全独裁による国防国家、国家総力戦による戦争遂行の基本プログラムが含まれていることが分かる」「陸軍は陸パンを發表してその反応を見ながら政治介入への道を探っていった」（前坂俊之『太平洋戦争と新聞』（講談社学術文庫、2007.5.11、p230）などの指摘にもあるとおり、日中戦争・太平洋戦争の進展とともに、〈高度国防国家〉の掛け声は名実ともに国内社会に浸透・定着し、〈総力戦〉〈戦時体制〉《国土防衛》などの派生用語が紙芝居作品のなかにも登場してくる。公式政治レベルにおいては、大東亜共栄圏の建設を掲げ「右世界史的発展の必然的動向を把握して庶政百般に亘り速に根本的刷新を加へ万難を排して国防国家体制の完成に邁進することを以て刻下喫緊の要務とす」と表明した第二次近衛内閣の「基本国策要綱」（1940年7月26日閣議決定）が転換点をなし、1940年9月30日には総理大臣直轄の「総力戦研究所」が開設されるのである。

『一票を護る』1941.08の「（候補者の演説）今日の戦争は単に武力だけの戦争ではない。経済戦、思想戦、宣伝戦、外交戦争等々、国家総力戦である」は、上記『陸軍パンフ』の紹介箇所そのままの転用形となっている。しかし、太平洋戦争開始後には、「みんなで防諜、これこそ一億国民自分自分の腹で出来るご奉公、総力戦ではあなた方一人一人が戦士です」（『スパイ御用心』1941.12）と一億国民の総戦士化が打ち出され、「今日の戦いは文字通りの総力戦、国を挙げてのたたかい。総力戦の今日では最早戦線銃後という言葉もあってはならない、すべては一体」（『大建設』1942.03）と前線・銃後の区分なき一体化が訴えられるようになる。

ボルテージの高い同系列の用語使用例として、「生活の中に防諜を實踐し秘密戦に打ち勝ち、そして戦時下日本帝国防衛の万全を期しご奉公の誠を致すことこそ銃後国民の本分であります」（『防諜戦士』1942.06）、「今日では銃後と言う気持ちを持つのは誤りであって国内もまた戦場。国民はすべて国土防衛の戦士です、足腰立たない老人、小さい子供、病人を除いて全て敵機来襲に対する国土防衛の戦士です」（『家庭防空陣』1941.10）、「（青少年団戦時実践指針）我等は国土防衛に挺身す。このたつとい国柄を一センチでも敵に許してなるものか」（『少年團』1942.01）などの作品をあげることができよう。これら一連の用語は、〈高度国防国家〉〈総力戦〉への精神的備えを説くためにだけでなく、次のような、社会生活の引き締めや軍需工場での号令的文脈にも登場する。「（子供をもつ友人）うちではご飯を食べる前に皇軍将士とお百姓さんに黙祷をささげます。そしてこの戦時下に落ち着いてご飯がいただけることを感謝します」（『神様の配給』1943.03）。「（戦場は戦場、進む隊長続く将兵）これがそのまま工場の体制となつてこそ銃後産業が真に戦時体制を整えたといえるのだ」（『産

業報國』1941.10）。太平洋戦争後半になると（後半になって初めてというべきか）、〈総力戦〉の用語は、「（大東亜戦争は日米産業戦士の戦争）今こそ国を挙げての総力戦だ」（『我は何をなすべきか』1944.10）のように、直截的な戦意高揚ではなく、科学戦・産業戦の場面に用いられるようになる。

② 〈総動員〉／〈新体制〉〈大政翼賛（会）〉／《興亜奉公日》《大詔奉戴日》：

70年以上が経過した現在から見ると、これら軍部官僚の造語になるコトバ（政治言語）と、昭和初期の庶民の生活言語との落差には大きいものがあつた筈であり、それはどのように稀釈され、どこで解消されていたのだろうか、という疑問がある。メディアにおける戦時用語の横溢と国民生活の実態とのすれ違いは、出版物を統制する政府情報局にとっても大きな課題であつた。現に『出版物に依る戦時生活の明朗化に関する件』1944年には、「五．国民一般は直接日常茶飯の食生活に集中せらるる事實は看過する可からず」との認識が示されている。ここでは、そうした点に入る前に、戦時下紙芝居における用語使用の実例を、その微妙な変化の姿とともに見ていきたい。日本教育紙芝居協会の設立は、『国民精神総動員実施要綱』の閣議決定（1937年8月24日）のほぼ一年後であり、まさにこの時期の国策的役割を担って、同年9月機関誌『教育紙芝居』を創刊し、印刷紙芝居の出版を本格化させているからである。以下、同時代の背景をなす第一次近衛文相内閣の下で展開された〈国民精神総動員運動〉（1937年9月）、〈国家総動員法〉（1938年4月1日公布）、近代的・合理的な社会体制建設のために大衆組織を基に国民の統合を構想した第二次近衛内閣の〈新体制運動〉（1940年6月24日近衛枢密院議長辞任）、その“発展形”としての〈大政翼賛会〉（1940年10月12日発会）関連用語の使用例について、少し長くなるが脚本から引用する（一ここは書誌事項として脚本家名も示す）。

「（大東亜建設のための戦い—この立派な言い分の上にある戦争を戦い抜き大東亜の諸民族を理想の国に案内するためには）私どもは男も女も老いも若きも総動員で当たらねばならないのだ」（『敵だ！倒すぞ米英を』大政翼賛会宣傳部作、1942.12）。「（この大東亜戦争は今までの戦争とどう違うのか）日本も敵も科学陣を総動員して新兵器の開発の心血を注いでいる」（『我は何をなすべきか』納富康之脚本、1944.10）。「（大東亜建設が唯一の道）他人のお膳立てを待つのではなく、自分で国を守るのだ、自分たちの手で新体制を造るのだ。国のために働く心構え、これぞ大政翼賛」「国のために働く、これぞまことの大政翼賛、そこに自ずから新体制が盛り上がっていく」（『大政翼賛』砥上峰次編輯、1940.12）。「（八百屋の熊さん、翁の説教に）俺は一番大事なことを忘れていた。大政翼賛も一億一心も自分の気持を変える



ことから始まるのだった。よしこれからやるぞ」(『安樂傳授所』平林博脚本、1941.07)。「(世界をあげての大暴風雨、一億一心、カ一杯の高度国防国家を打ち立て)このやむに已まれぬ**新体制**日本の土台石としてどうしても必要なのが隣組(隣保班)なのです」(『常會の手引』日本教育紙芝居協會脚本、1941.08)。「(友人三平の家へ手伝いに) **大政翼賛**の歌声も高らかに校門を後に隊伍堂々繰り出した勤勞奉仕隊の少年たち」(『翼賛少年』大政翼賛會懸賞当選作、1941.10)。「(紀元2600年盛典)私共国民はここに**国体の精神**に基づく**新秩序**建設への決心を愈々堅くしました」(『臣民の道』日本教育紙芝居協會脚本、1941.12)。「(ポストのおもちゃ、貯金で)私はこんなに太ってしまいましたよ。皆さんオモチャの**国も新体制**というものです、鉛の兵隊さんや汽車さんやみなさんは戦争だ、私は一生懸命貯金だ、みなさんは銃後の守りだ」(『オモチャの出征』堀尾勉脚本、1942.03)。「(農家の兄に)僕たちは今までの安樂な気持ちを捨てきれず、ほんとうに**新しい時代**を受け容れて新しい生活を築こうという建設的な気持ちがなかったんです」(『神様の配給』和田義臣脚本；日本教育紙芝居協會制作、1943.03)。「(息子の問いに父)それは今度日本文学報国会が情報局と**大政翼賛會**と共同して、何万と言う尊王愛国の歌の中から特に優れた歌を百首だけ選んでカルタにしたからだよ」(『物語愛國百人一首』納富康之脚本、1943.08)。「(5年生のクラス)毎月の**興亜奉公日**にはぎまって、慰問文を書いたり、出征家族・遺族を御訪問したり、時には近くの病院へ慰問に行くこともあった」(『安子の修業』平林博脚本、1941.12)。「それは第8回**大詔奉戴日**の8月8日、即ち昭和17年8月8日の朝まだき、帰艦を先頭にして我艦隊はソロモン諸島の沖を進んでいた」(『ソロモン海戦』鈴木景山脚本、1943.07)。

(注：興亜奉公日とは、国民精神総動員運動の一環として1939年9月から毎月1日に実施された生活運動で、国旗掲揚・宮城遙拝・神社参拝・勤勞奉仕などが行われた。太平洋戦争開始後は、「宣戦の詔勅」にちなんで1942年1月以降毎月8日の**大詔奉戴日**に統一された。)

やや煩雑な引用となったが、少なくとも筆者には、当時の日本教育紙芝居協會が担った国策的使命の全体性や作品としての創作性を、これらの作品から独自に看



図2 オモチャの出征

取することに困難を覚える。紹介した作品の一部は協會発足当時の幹部によるものであり、あるいは大政翼賛會懸賞当選作であるが、作品のなかで〈総動員〉は老若男女が科学と常に結合され、〈新体制(秩序)〉は個人・地域を統制的に吸い上げる国家建設か新たな国際秩序を名状する大東亜建設の別名であり、〈大政翼賛會〉に至っては団体名の機械的な文脈配置でしかない。仮にも、絵画と言語の複合作品である紙芝居の脚本は(絵画はともかく)、主題の設定、言葉の選択、演劇性・人物像の形象、場面の転換といった要素によって作品の強度・自立性が計られるものであろうが、上記に見る〈総動員〉〈新体制〉〈大政翼賛(会)〉の用語登場場面は、主題の請け負いから来る言葉の安易な借り物性、場面転換の恣意性を明らかに示すものとなっている。創られる作品の物語性・記録性の相違を考慮したとしても、マスコミ用語のオートマティズム使用に近づき、政治言語と生活用語の落差はほとんど意識されていない。鶴見俊輔が、明治中期から昭和戦時下に至るまで国内社会に深い影響を及ぼした『教育勅語』について、「日本人が自らの道徳上ならびに政治上の地位を守る定期券(パス)の役割を果たす言葉」(『戦時期日本の精神史』岩波現代文庫、2001.4.16、p60)と名指した評言をここに重ねたいところだが、用例①に見た〈高度国防国家〉〈総力戦〉に比べても、言葉の内圧の“高さ”が微妙にしかし確実に失われているように思われるのである。戦時下紙芝居の先駆的研究において、「紙芝居の芸術性の強調は、紙芝居の大衆性と教化性を美化するための補完でしかありえない」(櫻本富雄『戦争と紙芝居—銃後の子供たち』マルジュ社、1985.8、p74)との指摘があることも想起しておくべきところであろう。

③ 《近衛首相(声明)》《日ソ中立条約》《外交三原則》《東条英機》:

この時期の政治舞台に欠かせない二人の政治家の名前を、当時の外交シーンに登場する場面から(間接的な表現を含めて)採録することができる。《近衛文磨》と《東条英機》である。東条は、この後の〈翼賛選挙〉に集中的に表れるが、ここは彼の外交場面における唯一の登場として取り上げる。

「(国民政府役人の長兄と通訳勤務の妹、帰順兵となった次兄へ) 汪主席と**近衛首相**の声明が発表されたのよ」、「可哀想な兄さん、世界はどんどん進んでいるのよ。日本軍は仏印に進駐したし、ソ連とは**中立条約**ができてるし、イギリスは」(『光りの歌』1942.07)。本作品は、1941年5月支那派遣軍に投降した蒋介石直系軍の調査に当たる日本軍中尉を介して、省政府の役人となっている中国人の長兄と通訳の妹が、元抗戦兵士であった帰順兵(敵対を止め降服した兵隊)の次兄に対して、大東亜共栄圏理念の正しさを説得し回心させようとする物語である。前者の「汪主席と**近衛首相**の声明」は、ドイツ

の和平仲介失敗後のいわゆる「国民政府を相手にせず」声明（1938年1月13日）を否定し、大東亜新秩序建設への支那国民政府の参加を呼びかけた第二次近衛声明（同11月3日）に応じて重慶を脱出した汪兆銘との協議に基づく第三次《近衛声明》（同12月22日）を指しているだろう。後者の「ソ連とは中立条約ができてる」は、言うまでもなく、第二次近衛内閣（松岡洋右外相）時にスターリン・ソ連との間で調印した《日ソ中立条約》（1941年4月13日）である。

近衛文麿の最後の外交場面への登場は、『大建設』1942.03の「（開戦前の日米交渉）何とかして平和の裡に解決を図ろうとして米国に次のような外交上の3つの原則を示したのであります」である。紙芝居には、日本側の三原則「1. 支那事変をしとげることの妨げをするな、2. 軍事的経済的の封鎖を解け、3. 欧羅巴の戦禍を東亜に持ち込むな」に対して、アメリカ側の回答「1. 支那仏印より我が陸海軍の無条件全面撤退、2. 南京政府の否認、3. 日独伊三国条約の破棄」が「架空の原則論」として対置されている。

東条英機の登場は、同じく『大建設』における「さる1月20日東条総理大臣は帝国議会の壇上から広大雄渾な大東亜戦争の指導方針を中外に向かって明らかにいたしました」である。この方針とは、近衛の後を受けて1941年10月18日に総理大臣に就任した東条英機が、日米開戦直後の1942年1月21日（紙芝居では20日）に、帝国議会で表明した大東亜共栄圏建設の指導方針であり、1943年11月6日の大東亜会議共同宣言の原型となるものであった。

このような日中戦争・太平洋戦争の指導者の国際関係への関与を扱った紙芝居脚本の意図や精度（特に太平洋戦争前の日米交渉の描写）を現時点から糺すことは別の独立した仕事を必要とするだろう。たとえば、第三次近衛声明に信頼して和平交渉に入ることを主張した汪兆銘は、重慶の国民党から漢奸（売国奴）として党籍を永久剥奪される。日ソ中立条約調印のため独ソ歴訪中に自らの関知しないルートで進んでいる日米諒解案（ハル四原則を受け入れた日米関係の打開案）に異論を唱えた松岡洋右は、近衛に外相を更迭される（実際は近衛内閣の総辞職）。大東亜会議開催後の戦局悪化を打開するとして陸軍大臣（軍政）・陸軍参謀総長（軍令）を兼任した東条英機は、岡田啓介・近衛秀麿ら重臣グループの内閣倒閣運動によって退陣する。青年政治家として国民のカリスマ的期待を集め三次にわたって総理を務めた近衛文麿は、戦中は開戦の、戦後は戦争回避の非決断を批判され、戦犯逮捕指令で巣鴨に出頭する前に服毒死する。一何ものにも優先される生活的営為のなかで同時代の事実推移を歴史的認識として昇華する条件の厳しさは、異常な報道管制のもとにあった戦時下と現代との単純な比較を許さない。しかし、紙芝居脚本に出現する公式用語を追う限り、政治・外交上のトピックス的文脈で取

り入れられたこれらの人物や出来事が、いわば、その背後に創作者が隠れる“消失点”となっていることは指摘しておかなければならない。平均20枚前後という紙芝居表現の物理的限界は、言論管制下のマス言語の帯域を構成した国策紙芝居の弁明を助けることにはならないからである。

④ 〈東条英機〉〈翼賛選挙〉：

敗戦後の東京裁判でA級戦犯として起訴され、絞首刑の判決を下された東条英機が、紙芝居作品に登場するのは、大東亜共栄圏建設の指導方針を表明する『大建設』1942.03（上記③）を含む以下の3作品においてである。

『總意の進軍』大政翼賛會宣傳部原作；翼賛紙芝居研究會脚色、1942.03—「（阿部信行大將を会長とする翼賛政治体制協議会発足）東条首相は発足の言葉を力強く述べて曰く、大東亜戦争下において今次の総選挙を行わんとする所は・・・」。「（息子と父の会話）そう言えば今年は総選挙が行われることになってましたね。うむ4月30日が投票の日だ、たしか満5年目の総選挙だろう」。「この時政府では大東亜戦争終局の目的完遂のために、清新にして強力なる翼賛議会の確立をめざし・・・」。

『大建設』選挙肅正中央聯盟編、1942.03—「（支那事変は大東亜戦争へ発展、しかしこれは来るべきものが来たまでのこと。大東亜戦争の完遂こそは世界の歴史を一変し地図を一新する理想の大建設戦）。近いうちに衆議院議員の総選挙を行わなければなりません、それも亦この大建設をやり抜くための国民的精進の一つであります」。「今日ほど国家が政治に対する国民の忠誠を要請するときはありますまい。今度行われる総選挙に日本中の最高の人材と智能を総動員して帝国議会に送る、それが即ち政治に対する全国民の忠誠、選挙に当面して実践せねばならぬ臣道」。「つつしみて大政を翼賛し奉る。ここに日本独特の立憲政治があるのであります。投票も亦この敬虔な信念から行わるるものでなければなりません」。「いかなる難局にも撓まない勇氣をもって国策に協力することのできる第一流の人材を帝国議会に」。

『新生』三思會編、19—（出版年不明、戦後の作品）—「（終戦後の帰省列車の中）汽車の中は戦争中よりずっと活気づいていた。東条大將の自殺未遂、フィリピンにおける日本軍の暴行、原子爆弾（略）話題はいくらでもあった」。

かの〈東条英機〉が、戦時下紙芝居の中に、先の外交所場面と“ここ”（翼賛選挙、帝国議会）にしか登場せず、また戦後すぐの作品には「GHQによる逮捕直前の自殺未遂」と風評的にのみ取り上げられることに、最高権力者への民衆的嫌厭を、あるいは軍への速やかな戦争責任転嫁を敢えて見るべきだろうか。

〈翼賛選挙〉—1942年4月30日戦時下で行われた唯一の国政選挙—については、日本教育紙芝居協会の上位団体・日本少国民文化協会をも傘下に収める大政翼賛會、



有力な国策紙芝居作成機関であった翼賛紙芝居研究会(山本武利『紙芝居:街頭のメディア』によれば一点あたりの発行部数が約17000部弱ときわだて多い)、さらには、政界浄化を求める国民世論を背景に後藤文雄内閣のもとで内務省革新官僚が組織化した選挙粛正中央聯盟(1942年には「翼賛選挙貫徹運動」に解消)といった諸団体が、こぞって制作に関与した選挙プロパガンダ作品であるという以外に、脚本そのものにはコメントの術がないように思われる。しかし、この第21回衆議院議員総選挙は、1937年4月第20回総選挙の任期満了に伴い本来は1941年4月に実施すべきであったところ、日中戦争の最中であるとの理由で議員任期を臨時的に一年延長して行われたものであり、「選挙法通り総選挙が行われていれば、日本国民は太平洋戦争突入の八か月前に何らかの民意を示すことができたはずである」「戦争前と戦中では『民意』に何からの違いがあったはずである」(坂野潤治『昭和史の決定的瞬間』ちくま新書、2004.2.5、p27)との指摘がなされるところでもある。



図3 大建設

また、紙芝居『大建設』における「**日本独特の立憲政治**」とは、独伊ファシズムの議会政治否認と異なる国体を中心とした祭政一致的政治体制を唱えた林銑十郎内閣(1937年2月2日～6月4日)の標語である。1941年まで『ニューヨーク・タイムズ』記者として日本に滞在したヒュー・バイアスは、「林銑十郎大將は、僅か数ヶ月の総理大臣時代、好んで立憲政治尊重を口にしたが、『日本独特の立憲政治』と言うことを忘れなかった。独逸にはヒットラー、ソ連にはスターリン、伊太利にはムッソリーニ。日本にはそんな名前がない」と当時の日本政治を評している(『敵国日本』刀水歴史全書、2001.9.10、p57。一本書の原本は、1942年6月ニューヨークを出る第一回日米捕虜交換船に既に積み込まれ、戦後、岩波書店の月刊誌『世界』1946年1月号(創刊号)・2月号に翻訳・分載された)。林の施政方針演説「尊厳なる我が國體の下に萬古不磨の欽定憲法が嚴として存するのでありまして、我が立憲政治が萬邦無比の我が國體に即した獨特のものとして、世界に渦く如何なる思潮

の流にも毅然として健實なる發達を爲さんことを期して居るのであります」(日本政治・國際関係データベース/東京大学東洋文化研究所田中明彦研究室)といった復古的思想を内実とする「**日本独特の立憲政治**」が、1937年から5年後の衆議院選挙における選挙粛正中央聯盟作の紙芝居に標語的に転用されていることに、ほぼ全ての政党が大政翼賛会に合流した後の膠着した政治空間の中の同時代人が透視される。

⑤ 〈国難(国家非常、国の危急、国の一大事)〉《国威》:

最後にもう一つ、この時代を通して随所に表れる用語として〈国難(国家非常、国の危急、国の一大事)〉を取り上げなければならない。

この用語は、鎌倉時代末期の「元寇」、江戸末期の「黒船来航」、そして昭和前期の「現代的戦時下」という三つのパターンで紙芝居作品に登場する。

『大事到来』1942.01の「我が国土が未曾有の**国難**から見事に守られたのはもとより御稜威によるのであるが」、および『初陣』1944.04の「御身をもって**国難**にかわらせ給おうと神前にお祈りなされた龜山上皇の御心が神々に通って神風がここに吹きおそったのです」は、天皇の威光あるいは天皇の祈祷加護によって蒙古襲来からの防御を果たしたという国史の想起であり、『敵国降伏(がうぶく)』1944.08の「ただ国民が一つ心に力を協せてこの**国難**を乗り切るのだ。各自おのれの職場を守りご奉公の誠を尽くすのだぞ!」は、非常時における国民的一致協力の呼びかけに元寇「元軍、北より来る」の史実を援用する作品である。



図4 敵國降伏

黒船来航になると、「**国難**来る!嘉永、安政の二度に亘るペルリの来朝があつて(ついに文久三年英米仏の通商要求)」(『兵制の父大村益次郎』1942.11)と、近世末期の國際關係への現実認識が浮上してくる一方、「(黒船)お国の一大事に巡りわせるといふことは有難い幸せじゃな、身を以て**国難**に当たる!ああ男に生まれた甲斐があつた」(『我は海の子』1945.01)のように、戦争末期(1945年!)の非常時を運命的な出来事として主

体的に受けとめようとする表現をとどめるものもある。

三つ目の昭和戦前・戦中期の現在的〈国難〉は、紙芝居の中で次（刊行年順）のように描かれている。

「隣同士は銃後の戦友。皆で担う**国難**、皆で築く新東亜」
（『常會の手引』1941.08）。「（開戦後の連戦連勝、しかし）
どんな**国難**も乗り越えて。どんな反撃も跳ね返して。
でなければ（略）あいつ共に血をすすられてしまうのだ」
（『敵だ！倒すぞ米英を』1942.12）。「今や有史以来未曾
有の**国難**に当たり一億一心有難き聖慮を奉戴して征戦
の本義をつかみ撃ちて止まむ」（『撃ちて止まむ』
1943.03）。「（出征した兄の手紙）この**国家非常**の秋に
当たって一人でも多くの有為の青少年が海軍に志願し
てほしい」（『海の母』1943.07）。「（友人の戦死に靖国
で自分も続くと誓う夫。この自分は戦う国の妻であり母）
日本人は戦っているのだ、男の人たちは**国の危急**に赴く
べく次々と戦の場（にわ）に出征（いでてゆ）く」（『妻』
1943.07）。「（敵アメリカは内南洋マーシャル諸島に來
襲、我が守備部隊は全員戦死）今や我が国は未曾有の**大
国難**に直面している」（『我は何をなすべきか』
1944.10）。「（敵はすでに我が中部太平洋の諸島に上陸
を強行してきたのだ）今や我が国は未曾有の**大國難**に直
面している」（『一億楠公』1944.10）。最後の二つは同
一脚本家の同年月に刊行された作品であるが、「今や我
が国は未曾有の**大國難**に直面している」がいわば決言
葉として使用されている。

有史以来の国難に対する銃後一億国民の精神的団結、
国家非常のとき自分の後に続けと呼びかける兄、国の危
急に女性としての立場を覚醒する妻（母）、敗色濃厚な
太平洋戦線の危機（大國難）と、多様な語りで〈国難（**国
家非常、国の危急、国の一大事**）〉をキーワードにした
国内の戦意高揚が呼びかけられる。〈国難〉の質の変化
とともにパセティックな響きが加わっていることが読
み取れよう。（一しかし、戦意高揚の対語でもあっただ
ろう《**国威**》発揚については、意外にも「（海員は日本
の国を自分の船に乗せているのだ。）**国威**を輝かすため
に真心を尽くして働くのだ。大東亜戦争は物を運ぶ戦争
だとも言える」（『海の男』1944.09）の水兵物語一作品
のみである。〈高度国防国家〉〈総動員〉〈総力戦〉〈国難〉
などに比して言葉が抽象的でイメージの展開力がやや
低いことによるものだろうか）。

ともあれ、〈国難（**国家非常、国の危急、国の一大事**）〉
を主題とするこれらの作品は、日本（人）が外国（異国）
の脅威に直面した時に、過去の歴史から呼び戻される同
一心性の物語におけるキーワードとなっている。本稿の
最初に、高度国防国家の建設を唱えた『国防の本義』の
末尾を紹介したが、その「冀はくは、全国民が（略）日
本精神の高調拡充と世界恒久平和の確立とに向つて邁
進せんことを」に先立つ行文は、「此の有史以来の国難
一然しそれは皇国が永遠に繁栄するや否やの光榮ある
国家的試練である一を突破し光輝ある三千年の歴史に

一段の光彩を添ふことは、昭和聖代に生を享けた国民
の責務であり、喜悅である」となっている。“未曾有の
国家的試練を突破することは国民の悦びを伴った責務
である”という一種の威喝的循環論法は、同じく『国防
の本義』「三、現下の国際状況と我が国防」の次のよう
な箇所にも繰り返されている。―「現下の非常時局は、
協調的外交工作のみによつて、解消せしめ得る如き、派
生的の事態ではなく、大戦後世界各国の絶大なる努力に
も拘らず、運命的に出現した世界的非常時であり、又満
洲事変と聯盟脱退とを契機として、皇国に向つて与へら
れた光榮ある試練の非常時である。吾人は姑息偷安の回
避解消策により一時を糊塗するが如き態度は須らく之
を警戒し、与へられた運命を甘受して、此機会に国家百
年の大計を樹立するの決意と勇氣とがなくてはならぬ」
（下線引用者）。非常時を運命的に甘受しようとする表現
が、太平洋戦争末期の紙芝居作品に至るまで、「（黒船）
お国の一大事に巡りわせるということは有難い幸せ
じゃな、身を以て**国難**に当たる！ああ男に生まれた甲
斐があった」（『我は海の子』1945.01）のように現れて
いることを上述したが、国難の甘受・試練の克服を悦び
を伴った責務とせよとする、いわば“受動と能動の混線
を意に介さぬ文法（論理！）”は、その他の多くの戦時
下文書に共通する特異性であり、紙芝居もまたその呪縛
的文法の例外であることを免れていないのである。

本稿（連載第3回）は、第一次近衛内閣（1937年6
月4日～1939年1月5日）が「挙国一致」「尽忠報国」
「堅忍持久」の三つのスローガンを掲げ国民精神総動員
運動を展開した1937年前後を起点に、東条内閣の出現
（日米開戦・翼賛選挙）に至る期間の〔政治・外交〕を
表現する用語を、紙芝居脚本における具体的な使用例に
重点を置いて紹介した。本文中、〔政治・外交〕の場面
を端的に表すために時流に乗りやすい表層の用語が
キーワード的に使用されており、そこに国策紙芝居の国
策性（あるいは大衆メディアとしての自意識）の所在を
確認した。また、「日本人が自らの道徳上ならびに政治
上の地位を守る定期券（パス）の役割を果たす言葉」（鶴
見俊輔）が国策紙芝居に携わった創作者集団をも規定し
ていただろうこと、国難の甘受（受動）と試練の克服（能
動）の循環を無矛盾的に内包する威圧的論理が戦時下の
言論に共通することなどを、特徴として指摘した。

軍部主導の高度国防国家から内閣主導の新体制への
転換を図ろうとしたこの時代の政治と国民的運動の展
開と挫折。それが戦時下の国民生活にもたらしたもの―
これは、次回以降に取り上げる〔国内社会：17／生産・
食料・資源、18／交通・通信、メディア、19／教育、
20／銃後生活、銃後団体、21／動員・奉仕・生活改善、
22／標語、23／防諜、防空〕として採録した用語分析
の課題である。（続）



『非文字資料研究』（旧『年報 非文字資料研究』）への寄稿について

人類文化の研究は、人間それ自身と人間が織り成す社会を研究することを目的とするが、その研究は文字で表現された資料を主な対象として行われてきた。しかし、人間の活動とその結果生み出されるものは、文字で記録されたものに止まらない。絵画・写真・映画・建築・民具・音声などの形で記録されたり、地形や景観あるいは人間の身体それ自身に刻み込まれたりもする。さらに、匂い・しぐさ・味覚・感触など「記録化」することが難しいものも、人類文化を構成する大事な要素である。

非文字資料研究センターは、そのような文字以外の記録及び文字では表現されにくい人間の諸活動を「非文字資料」として体系化し、それを研究する新しい方法を開発し、より包括的な人間と文化の理解にいたることを目指している。21世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」（2003－2007年度）以来、わたしどもは、その目的を達成するために＜図像＞＜身体技法＞＜環境・景観＞のなかから研究課題を絞り込み、共同研究を展開してきた。この共同研究は、歴史学・民俗学はもとより、文化人類学、比較文化論、美術史、建築史、災害史、情報科学などを専門とする内外の研究者によって支えられてきた。

このように多様な学問的広がりをもつ非文字資料は、世界各国の地域文化の諸相を具体的かつ可視的に示す絶好の資料であるとともに、資料自体が多層的な時代・地域において蓄積されてきた背景をもっているため、研究方法としても比較歴史的な視点を求めるものであり、ひいては、人類文化研究の総合的・学際的な発展の可能性を有している。

しかし、研究資料の分析指標の設定、意味の解説という困難な作業には、研究概念と成果の普遍性が求められる。また世界共通の標準的・普遍的な研究資料の資料化・体系化を行うには、世界各地の関連学問分野の研究者による相互検証が不可欠である。本センターの研究活動においても、関係研究者との共同作業を必要としている。

『非文字資料研究』は、世界の各地域において活躍されている非文字資料研究者からの寄稿を歓迎し、本誌が多分野にわたる研究者相互の学問的遭遇の場として発展するとともに、人類文化の豊かな研究に寄与することを期待する。

2016年度より誌名を『年報 非文字資料研究』から『非文字資料研究』へと変更し、年2回の刊行となります。寄稿をご希望の方は、当センターのホームページをご覧ください、執筆要項等の詳細をご確認ください。

エントリー募集期間：前期 1月～3月 後期 7月～9月

原稿締め切り：前期 5月末 後期 11月末

※原稿ご提出後、査読があります。

エントリー用紙：当センターのホームページよりダウンロードしてください。

年報執筆要項：当センターのホームページよりご確認ください。

エントリーシートの提出・お問い合わせ先：非文字資料研究センター

E-mail: himoji-info@kanagawa-u.ac.jp

ホームページ：<http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

主な研究活動

運営委員会

2015 年度

- 第 4 回 2015 年 7 月 22 日 2014 年度奨励研究成果論文査読分担について、2015 年度海外提携機関への派遣研究員について、他
- 第 5 回 9 月 30 日 2015 年度班共同研究予算の追加申請について、2014 年度奨励研究査読結果について、2015 年度海外提携機関への派遣研究員について (条件付き採択者の再審査)、他
- 第 6 回 10 月 28 日 非文字資料研究センター・センター長選出に関する確認事項、2016 年度非文字資料研究センター予算編成について (案)、センター研究員人事、他
- 第 7 回 11 月 25 日 非文字資料研究センター・センター長選出について、2016 年度非文字資料研究センター予算 (案) について、センター研究協力者人事について、センター第二回公開研究会について、他
- 第 8 回 2016 年 1 月 27 日 非文字資料研究センター 2015 年度第三回公開研究会について、他

研究員会議

2015 年度

- 第 3 回 11 月 25 日 フランス国立高等研究院への若手研究者派遣について、非文字資料研究年報の発行遅延の改善策について、他
- 第 4 回 2016 年 1 月 27 日 海外提携機関との招聘研究員・派遣研究員の日程変更について、他

研究会

研究班

2015 年度

- 海外神社跡地のその後 11 月 28 日
- 中国・朝鮮の旧日本租界 - 現況調査と現地で発行された出版物の分析 - 9 月 25 日、11 月 6 日
- 戦時下日本の大衆メディア研究 8 月 9 日
- 南九州生活絵引 2 月 22 日

現地調査

調査テーマ	日 程	場 所	調査メンバー
インターネットエコミュージアム	6/6-6/9	台湾	木下宏揚
19 世紀前期ヨーロッパ生活絵引研究	7/28-8/20	ミュンヘン	ステファン・ブッヘンベルゲル
船上生活者の実態とその変容に関する研究	7/6-7/12	中国大連・長春	森武磨・松本和樹
汽水の生活環境史	8/28-8/30	和歌山	安室知・山本志乃・常光徹・川島秀一・松田睦彦
戦時下日本の大衆メディア研究	9/10-9/12	台湾	安田常雄・森山優・鈴木一史・松本和樹
戦時下日本の大衆メディア研究	12/7-12/10	台湾	安田常雄・森山優・鈴木一史・松本和樹・新垣夢乃
19 世紀前期ヨーロッパ生活絵引研究	2/18-3/1	フランス・パリ	熊谷謙介
中国・朝鮮の旧日本租界	3/13-3/19	中国湖北省	大里浩秋・孫安石・内田青蔵
汽水の生活環境史	3/17-3/20	徳島	安室知
汽水の生活環境史	3/10-3/14	八戸・仙台	山本志乃
汽水の生活環境史	3/7-3/9	那智勝浦	川島秀一
汽水の生活環境史	2/20-2/24	高知	常光徹
海外神社跡地のその後	2/10-2/17	フィリピン・ダバオ他	中島三千男・小熊誠・稲宮康人
南九州生活絵引	4/3-6	坊津	小熊誠
南九州生活絵引	2/15-18	鹿児島	駒走昭二
海外神社跡地のその後	9/7-8	新潟	津田良樹
中国・朝鮮の旧日本租界	5/23-24	京都・大阪	須崎文代

編集後記

今号は『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』刊行、またそれを記念した 3 月末の公開研究会に合わせて、イタリア、フランス、ドイツの都市風景画が各執筆により分析されています。渋沢敏三が生んだ「絵引」のコンセプトが、ヨーロッパ都市生活論に与えるインパクトが大きいことを期待しています。また好評を受けている『北九州船上生活者』について、研究代表者による詳細な紹介がされています。新たに加わった研究員のエッセイからは、たえずアップデートされる非文字資料研究の「今」が確認できるでしょう。ニューズレターは新たに年二回発行されるようになった『非文字資料研究』とともに、最新の状況を伝える媒体となることを願っています。(K.K)

表紙紹介

表紙の写真はカナレットの《リッチモンド・ハウスから望むロンドン市外とテムズ川》(1747)です。カナレットはヴェネツィアの都市景観画というジャンルを打ち立てた画家で、『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』でも多くの作品が分析されています。この絵は、彼がロンドン滞在中に、彼の絵の顧客であったリッチモンド公爵の邸宅から描いた風景です。画面の中央を占める見事な水辺の景観と、川辺に憩う、まぶしいばかりの白いドレスが特徴的な人びとのコントラストは、「カナレットはヴェネツィア人の目で、ロンドンを見ている」という言葉を生んだほどでした。春という陽光の季節に合う一枚であればと思います。(K.K)

※写真は Wikimedia Commons より

神奈川大学日本常民文化研究所論集32

『歴史と民俗』32

● 2015年2月25日刊行 平凡社刊

特集《和船》

- ・小島孝夫「和船—和船資料の保存と活用に向けて」
- ・廣瀬直樹「『越中魚津漁業図説』と船—図像資料にみる富山湾の和船」
- ・織野英史「二枚水押船—淀川・大和川水系の主要川船」
- ・刈田均「鶴見川の水運と和船」
- ・神野善治「八丈島のフナダマサン—船の民俗学から」
- ・須田充洋「木造漁船雑感—実測を通して」
- ・小野寺幸市「江戸前和船の動態保存—東京都江東区の例を参考に」
- ・昆政明「船絵馬に見る舟才船の帆走」

〈一般論考〉

- ・全京秀「伊能嘉矩の台湾研究に関する方法的再検討 —〈巡台日乗〉（1897年）の精読を通して—」
- ・内田青蔵「『玄関』から見た明治以降の住宅の洋風化に関する一考察—戦前期刊行の建築系関連書籍を主資料として」
- ・津田良樹「駿河国駿東郡柳沢の赤野観念堂の建築について」
- ・津田良樹・杉江知樹・山家京子・鄭一止「横浜市六角橋商店街仲見世通りの成立と空間変容」

二神司朗家文書 中世文書・系図編 (神奈川大学日本常民文化研究所所蔵資料)

● 2016年3月刊行

常民研が2008年度から実施してきた「共同研究 瀬戸内海の歴史民俗」の成果として、常民研が所蔵する膨大な文書二神司朗家文書のうち、巻子に仕立てられた中世文書4巻および関連する系図3巻を取り上げ、史料全点の写真・釈文・読み下し文・語釈・解説を掲載。

二神司朗家文書目録 三・四 (神奈川大学日本常民文化研究所所蔵資料目録)

● 2016年3月刊行

二神司朗家文書の目録集。三は明治41年～45年、四は大正元～昭和分の目録と全体の解説を所載。

明治農具絵図・関連文書群の全国調査 (日本常民文化研究所調査報告書24集)

● 2016年3月刊行

明治期に全国各地で作成された農具絵図についての調査研究報告書。研究論文のほか、各種資料一覧、『農道具図面御達控』『南豊島郡農具一式之図』『鶴田縣普通農具圖解』『日高郡農具絵図』『農具絵図面』『農具概略図』『農具器械図面』ほか、図版資料を多数掲載する。

非文字資料研究センター 研究成果報告書 18世紀ヨーロッパ生活絵引 都市の暮らしと市門、広場、街路、水辺、橋

ヨーロッパでは、16世紀のオランダで、都市とそこに生きる人々の様子が絵画に描かれ始めた。18世紀になると、このような関心と画法が他のヨーロッパ諸都市についても発揮されるようになる。その結果、18世紀ヨーロッパのいくつかの都市と人々については、当時の画家たちが描いた絵画や版画が、いわば同時代の証言記録として残っている。本書は、そのような同時代の記録としての絵画・版画を利用しながら「絵引」のかたちを整えたものである。

● 2015年3月20日刊行

● 内容：

- 第1章 市門
パリ・ミュンヘン・
ヴェネツィア・ローマ
- 第2章 広場
ロンドン・パリ・ミュンヘン・
ウィーン・ヴェネツィア・ローマ
- 第3章 街路
ロンドン・パリ・ウィーン・
ヴェネツィア・ローマ
- 第4章 水辺・橋
ロンドン・パリ・ミュンヘン・
ウィーン・ヴェネツィア・ローマ

付録
18世紀のヨーロッパ都市概説
画家一覧・略歴
参考文献一覧



島の写真帖vol.2 Photobook of Futagami Island

● 2016年2月刊行

共同研究「瀬戸内海の歴史民俗」の成果として刊行する写真資料集「島の写真帖」の第2弾。瀬戸内海の小島・二神島に暮らす家々に残された家族のアルバムを、「誕生と成長」「学校の生活」「青年団の活動」「消防団」「婦人会の働き」「祭り」「祝いの宴」「催しごと」「暮らしの一瞬」「家」「悼み」「漁業」「農業」「生活用水」「船」「二神島の風景」「由利島」の17項目に再編集し1243点の写真を掲載。

神奈川大学日本常民文化研究所 年報2014

● 2016年2月刊行

日本常民文化研究所の動向を発信する新媒体『年報』の創刊号。非文字資料研究センター、国際常民文化研究機構を含む2014年度の事業内容及び活動報告、各研究員の研究活動、論文1本を掲載。

〈目次〉

- ・第1部 常民文化研究講座・研究会開催報告
- ・第2部 調査・研究活動報告
- ・第3部 活動記録
- ・第4部 研究論文

非文字研究者の 新刊紹介

※内容につきましては、
目次より抜粋して紹介しました。

台湾旧神社故地への旅案内—台湾を護った神々— 金子展也(著)

● 2015年9月1日刊行

● 発行：神社新報社

● 価格：2,400(税別)

● 内容：

- 旧神社故地の紹介
- 台湾の神社概要■
- 北部編■
台北市 新北市
基隆市 宜蘭県
桃園県 新竹市・新竹県
苗栗県
- 中部編■
台中市 彰化県
南投県 雲林県
- 南部編■
嘉義市・県 台南市
高雄市 屏東県
- 東部編■
花蓮県 台東県
- 台湾における神社一覧表
付録



非文字資料研究 No.35

発行日 2016年1月31日発行

編集・発行 神奈川大学 非文字資料研究センター

Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

